
時計塔に眠る怪人

keisei1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時計塔に眠る怪人

【Nコード】

N0041Z

【作者名】

keisei1

【あらすじ】

ファンタジー小説家でシングルマザーの優那裸留枷^{ゆいのか}は一人息子の伊瑠^{いる}に話して聴かせている寓話「時計塔に眠る怪人」と一致点が数多く見いだされる「別世界」へとある日運ばれる。そこでは異人種間戦争が行われていた。その「別世界」で出逢った青年は裸留枷の寓話「時計塔に眠る怪人」の主人公と同じ名前、「ジファ・セラヴィナ」を名乗る。彼は政府にA級不穏分子と断定され、特務機関「AMSSOI」に追われていた。ジファと国防軍の争いに巻き込まれた裸留枷は、ジファと「二つの世界」を巡る謎解きの旅へ向か

うのだった。
アメブロに掲載済み。

プロローグ 優那裸留枷

プロローグ
優那裸留枷
ゆうなはだかづか

今夜は私の七作目の小説、「ザ・ドロービング・ナイフ」の出版を祝う食事が催されていた。出席者は私と私の一人息子、伊瑠を含めた7人。まず編集者の芳賀夏芽^{はがなつめ}。二十代半ばなのに娯楽小説の将来を見据える好青年だ。次に挿絵を担当したグラフィックデザイナー^{せとかなせ}の瀬戸香納世。40間近に迫り、より鋭い絵画センスを磨く男性。時折小難しい美術用語を使うのがクセだ。三人目は宣伝部長の七敷河雉^{ななしきかじ}。三十代後半の才色兼備の女性。男性からは引く手あまた。それなのにビジネス上の成功を最優先する独立独歩の人。彼女の流通術は素晴らしく、私の前作が5万部を売り上げたのは彼女のおかげだと言われている。そして私の親友、新進気鋭の小劇団を主催する橋音々^{はしおと}（たちばなねね）。才能を早くから評価され、将来を期待されている。それにも関わらず本人は意に關せず。余暇にはギャンブル、クラブ巡り、ロックバンドのライブなどを楽しむ女。まっ自由人だ。六人目が私の同業者、同じファンタジー小説家の風氏^{ふうし}塔^{とう}。私より五つ上の男性。お互いライバル心を抱きあつて切磋琢磨^{せつさくさく}といきたいところだが、なにぶん、彼は拍子抜けするほどマイペース人間。しのぎ合おうにも彼の心はどこか夢現。イメージネーションの空間にいるのだ。作家とはそもそも空想家。しかたないといえはそうだが少し肩すかし。寂しい気もする。最後に忘れてはならないのが六才になる我が愛すべき息子、優那伊瑠^{ゆうないる}。生意気ざかりだが家に帰ればまだまだ甘えたい年頃。子供時代なんて瞬く間なのでこれが最後とばかりに甘えさせてあげようと思っている。さて肝心の伊瑠の父親と言えはここにはいない。そう、私は離婚経験者のシングルマザーなのだ。離婚してもう二年経つ。イラストレーターをし

ていた元夫、河橋乃？は私の仕事にも理解があつたし、夫婦生活も円満だった。何より彼は優しく柔軟な発想の持ち主。収入の夫婦間格差なんて気にもとめないおおらかさがあつた。伊瑠の子育て、世話も進んで引き受けてくれた。何一つ申し分ない夫婦関係。それなのに不意に糸が切れるように愛情が薄れてしまった。多分信頼関係だけではコントロール出来ない感情の機微が二人に働いたのだろう。離婚手続きはスムーズだった、親権は私に託され、養育費、慰謝料は私から遠慮させてもらった。彼の独身生活の方が厳しくなるのが私にはたやすく予想出来たからだ。私は彼が新しい家族を築くのを望んでいる。だから前妻とのトラブルが再婚のハードルにならないようにしたかったのだ。週に二回の伊瑠との面会も私から提案したし、わだかまりは何一つなく別れた。ただことなく気丈に振る舞いすぎたと悔いが残つたのもホントのトコロ。譲つて、譲つてあげたのに、彼は時折涼しげに感謝の言葉を口にするだけ。「それはないんじゃない？」と不平の一つも漏らしたくなる。だけどここはグツとこらえて未来志向でいよう思っている。それが何より伊瑠のためにもなるのだから。フランス料理屋の長卓を囲んだ面々は、おのおの「ザ・ドローピング・ナイフ」の感想を口にする。皆、クリエティブなお仕事についてるせいかな、辛辣ながらも的を射た意見。おおむね好評なのはありがたいことだ。ザ・ドローピング・ナイフは直訳通り、「突き立てられるナイフ」からドラマが始まる。拡張戦争ばかりにウツツを抜かし、内政をおざなりする国王マヌカ。その父マヌカの寝首を息子ケルファが襲う。だが！首筋にナイフを突き立てたケルファはすんでのところであらう、思い止まる。彼は王国を捨てて、単身旅に出る。彼は旅先で様々な出来事、人々と出逢い、変わっていく。そう。ザ・ドローピング・ナイフとは自らの正義と、善悪の基準の狭間で揺れるケルファの心の変遷を描いた物語なのだ。香納世が美術的な角度から話をする。

「初め、ケルファがマヌカを襲うシーンが絵描きとして刺激的だった。ケルファの人格もイメージしやすかつたし、彼の情熱的な荒々

しさが表現されていて良かった。でも彼の最後の選択はどうだったんだろう。読者の間でも賛否が分かれるんじゃないかな。」

夏芽が直情家らしく、ファンタジー小説の新機軸を打ち出す。

「僕は小説の根っこ自体覆すのも一案だと思います。ケルファがそのまま父を刺し殺して始まって良かったと思うんですよ。その事実を隠し、王となり君臨する。その彼が一政治家としてどんな政治的手腕を振るうか。ちょっと知的な話になりますが、新しい発想の作品になると思いますよ。」

おい、それは物語を全否定するような意見だぞ。夏芽君。私の長きに渡る執筆活動をくつがえす斬新なご意見。どうもありがとう。チエインスモーカーの河雉？が煙草を吹かしながら言う。彼女には妖しげな魅力が常につきまとう。

「ケルファ君、青年期にある彼のセクシャリテイ、妖艶さが存分に描かれて良かったんじゃない？若い女性読者層に訴えかける要素がありあり。新しい購買者の開拓は常に意識しないとね。まっ、話事態はどうでも良かったけど。」

おい。書き手は目の前にいるぞ。遠慮のない奴だ。彼女らしいと言えばそれまでだが。ワインを大量にたしなみ、すでに「出来上がっている」音々が、味も素っ気もなく、愛すべき主人公ケルファ君を断罪する。

「仕事熱心な親父を刺し殺そうってんだから、早い話しつけがなかったたつてとこだな。てめえが政治をやってみろってんだ。きつと苦労すつから。」

彼女は果物ジュースを口に含む伊瑠の髪の毛をくしゃくしゃに撫でて、くだを巻く。

「なっ、伊瑠。世の中にやあ誘惑が多い。パパとママの言う事しっかり聞いて立派な男になれよ。決して人殺しを正当化するような人間だけにはなんなよ。」

もつともだ。でも彼女自身が誘惑に溺れた人間そのものに思えてならないが。頼むから伊瑠に悪影響だけは与えないでくれ。あんた

の暮しぶりはお世辞にも褒められたもんじゃないんだから。河雉？が、フランス料理の珍味を黙々と味わう塔？に話を振る。彼は賑やかな談笑には加わらず、食材の一つ一つを凝視し、何やら考えている。相変わらずマイペースな男だ。

「塔？君。君はどう思う？ケルファ君の行動原理は理解出来た？ストーリーの展開にも納得出来た？」

しばらく塔？は黙っていた。その間も皆の話は続く。河雉？がげんな顔をして、煙の立ち込める煙草を持つ手を止めると、もう一度塔？に呼び掛ける。

「塔？君？塔？君。塔？君。」

塔？は夢から覚めたように河雉？の声に反応する。

「はい？なんですか？河雉？さん。何の話です？」

河雉？が少し苛立たしげに（その圧迫感が男を取り逃がす原因なのだ。彼女はそこに気付いていない）彼を問いただす。

「何って。だから！「ザ・ドローピング・ナイフ」の感想。今夜はその出版記念の食事会でしょ？」

塔？は掛けていたハロルド眼鏡をあげると、心ここにあらずといった様子で、それでいながら鋭い分析をしてきた。

「感想。はい、感想ですね。良かったと思いますよ。価値感が混沌とする、昨今の時代背景を反映した壮大なストーリーだったんじゃないでしょうか。若い読者の共感も集めるコト請け合い。彼らに現代を生き抜くヒントを与えたんじゃないでしょうか。僕は思い悩むケルファ君の姿に大いに共鳴しましたね。とにもかくにも素晴らしい作品でした。」

河雉？の煙草の灰が零れ落ちそうだった。河雉？は呆気に取られて、これまたもどかしげに塔？をせき立てた。

「塔？君、しっかりした批評眼持つてるじゃない。その調子でより良い作品作りに励むように。裸留枷はあなたのライバル。いい競争相手なんだから。」

塔？は笑みを絶やさなかった。

「はいこれからも精進いたします。」

その後も話は賑やかに続き、食事は終わった。（塔？はその間中、ほぼ全時間に渡って料理の素材を神妙な面持ちで観察していた）帰り際、皆が店先でそれぞれ勝手気ままな要求を私に押しつけてきた。香納世。

「裸留枷さん。これからはもつとエロティシズムの暗喩を作品に入れて下さい。美術史とは厳格なモラルを持つアカデミズムと奔放な人間性を描写する反アカデミズムの闘いの歴史なんですから。」

「はい、充分に考慮します。」

夏芽。彼もかなり酔いが回っている。舌がかなりおぼつかない。

「裸留枷さん。自作はもつと冒険的で野心的な作品に挑戦しましょう。裸留枷さんの才能はファンタジー小説という一つのジャンルに留まらない。社会全体を巻き込むようなムーブメントを引き起こす。」

・・・うつ、吐き気が。」

大丈夫か？夏芽君。私は彼の評価を好ましく聴いていた。

「はい。ありがとう。夏芽君。これからもアドバイスよろしくね。」

「飲み過ぎたか？僕は大衆の身勝手な要求も飲み過ぎたか？」

・・・つまらん。河雉？。彼女は私の肩を叩く。

「さつ、これからも商業的利益を徹底的に追求して頑張ろう。目標は高く掲げて十万部だ。それぐらい尊大にしてもいいんだよ。作り手つてのは。」

「つくづく身にしみるお言葉です。」

「謙遜しなさんな。ニューウェーブの担い手さんよ。」

「ニューウェーブ」という言葉に彼女の世代、年齢を感じる。私はそのセリフが喉まで出掛かって飲み込んだ。音々。彼女は完全に出来上がっている。

「つまりなんだ。少年少女を相手にする物書きつてのは窮屈なもんだ。たまには私の劇団に遊びに来な。本流から外れた大人の演劇つて奴を見せてやつから。」

私は音々に言い返した。

「あんたの生活ぶり見てりゃ、作風も大体想像がつく。要はアンダーグラウンドでしょ。」

「固いこと言わない。人間何事も勉強、学習。好奇心がなくなったらおしまいよ。」

わりかしまともなことを言う。しらふだと支離滅裂で、酔ってるともともなのか。彼女はもう一度、伊瑠の髪をくしゃくしゃにした。こら、その子はお前の愛玩犬か。

「少年、伊瑠よ。お前はと思うんだ。ユア・マザーが作り上げた作品を。正直に感想言っていんだぞ。」

伊瑠はしばらく黙り込んだ。全員が伊瑠の顔を覗き込み、息を飲む。伊瑠は意を決して口にした。

「母さんの作品はただの娯楽小説じゃないと思う。啓発本っていうか、そんな感じかな。」

伊瑠の予想外の大人びた批評に皆、照れくさそうに襟を正した。音々だけは例外で大笑いしていた。

「一番のインテリ、教養の持ち主は幼稚園出立てのガキだったってわけだ。こりゃ灯台下暗しって奴だ。」

彼女は大笑いしていた。とにかく酔うと彼女は何でも楽しいらしい。親友の息子をガキ呼ばわりしてまでも。河雉？がもう一度塔？に意見を求めた。彼はポケットから取り出したレシートを物言わず見つめていた。

「さっ、塔？君。締めくくりの一言をどうぞ。あんた今夜ほとんど喋らなかつたんだから。」

「そうですね。皆の人生前途洋々、希望に満ち溢れていると行ったところでしょうか。僭越ながらも、それが率直な感想です。」

河雉？は眉をひそめた。

「締めまりねえなあ。塔？君も言葉のプロでしょ。もっと表現を選ぶ！分かった！？」

彼は気にも留めていないようだった。

「以後気をつけます。」

皆満足した表情で帰路についた。駐車場へ向かう私について来る伊瑠の頭を私は抱きしめた。伊瑠は物静かにしていた。

「ありがとう。伊瑠。でもそんなに背伸びしなくていいんだよ。子供は無邪気でいいの。じゃないと後で「反動」って奴が来るから。」

伊瑠は顔をしかめた。

「だって収拾つかないんだもん。あの人達。」

「違う。」

私は声をあげて笑った。私は伊瑠と愛車に乗り込むとエンジンを掛けた。こうして騒がしくも、愛おしくもある食事は終わった。私は帰りの車中、伊瑠と母子二人きりの時間を満喫していた。それは彼が青年になるまでの束の間の時間であると知りながら。私は存分に満たされていた。夜の街灯がほんのりと車を褐色に照らしだしていた。

ファントム 1 優那裸留枷

ファントム

優那裸留枷

自宅はマンションの小振りな一室。私は顔を洗い、着替えを済ませると、眠りかけの伊瑠を寝かしつけた。伊瑠は眠たげな目をこすりながらベッドに横になる。そして伊瑠はいつものように私お手製の寓話を聴かせるよう私にせがむのだった。離婚して以来毎晩のうに物語を私が伊瑠に話して聴かせてあげるのが眠る時の習慣なのだ。私は作家としての力量をいかになく發揮して、これまで幾つものオリジナルストーリーを伊瑠に聞かせてきた。黒豹の顔を持つ男の憎悪に満ちた流浪の物語。奢侈に溺れる貴族令嬢と、澄みきった哲学を持つ浮浪者の青年の争いと恋。頬に火傷の痕を持つ美しい女騎士の英雄物語。冤罪で右足をもぎ取られた航海士が新大陸へ到達するまでの叙事詩。権力闘争に脅える王子と奴隷の青年との友情。幽閉された科学者と教皇との親交。その他諸々。伊瑠の年頃はスポンジのように吸収力があり、少しばかり難しい話でも夢中になってくれた。私は私で、教養なんて無視してエンターテインメント性を追求した。作家の趣味嗜好が先走りして母親としての自覚が足りなかったかと思いましたが。伊瑠が一番気に入ってくれたのが黒豹の男の物語だった。クライマックス、黒豹の男が戦争賛美者の公爵の喉元に刀剣を突き立てるシーンを聴いた夜は、伊瑠は興奮して眠れなかったほどだ。その時は少し刺激が強すぎたとさすがの私も反省した。ただ伊瑠も血気さかな男の子らしく、壮大でヒロイックな話がお好みのおうだった。以前、試みに難聴の青年画家と高級娼婦の恋物語をお披露目した時はほぼ無反応だった。私は案外気に入っていたのだが。私は伊瑠の髪を優しく撫でて、時にドラマティックに、時に抑え目にして演出に幅を利かせた。今、話して聴かせている物語

は、かつて、王族の男が絞首刑にされた広場の中央に立つ時計塔。その地下に広がる水路の奥に身をくらませる「ファントム・怪人」と、純粹無垢な少年との心の交流の物語だ。この筋書きを伊瑠はとても気に入っているようで、続きを毎晩ねだった。私は陰影を滲ませて情景の描写を始める。伊瑠は静かに瞼を閉じた。

「少年ジファは今宵も夜闇に紛れて部屋を抜け出します。家族が寝静まるのを見はからい。朧な月は彼の暗い心を艶やかにあぶり出すように輝いていました。」

私は伊瑠との濃密な母子の時間を過ごし始めた。この物語のあらすじはこうだ。・・・百年もの昔。王位継承権争いの敗残者、壮年の男カルツァが公衆の面前で処刑された「琥珀の広場」が舞台となる。カルツァの処刑。民衆はその惨劇を疎み、隠蔽するかのようになり、広場を閉ざし、近寄る者は誰一人としていなかった。広場に立つ時計塔から、戯曲を好んだカルツァの死を悼むかのように舞台台詞を読み上げる声が滔々と、朧月夜に響き渡るのを幾人もが耳にしていた。人々はいつしか時計塔には、カルツァの怨念が乗り移った亡霊が徘徊しているのだと噂し始めた。彼らはやがてその亡霊を「時計塔に眠る怪人」と呼び、恐れた。閉ざされた時計塔は放置され、さびれるままになっていく。「琥珀の広場」から人々の足は遠のき、訪問者は途絶えた。そんな時代に人々の迷信をぬぐうべく時計塔に忍び込む一人の少年がいた。その少年の名はジファ。ジファ・セラヴィナと言った。ジファは肌が白く透き通った中性的な面立ちの少年で、指は妖艶な程に細く長く、爪先にまでその蠱惑的な魅力が溢れていた。野性味と優雅さをかね備えた瞳の奥には冷たさと深い憂いが潜んでいる。彼は夜更けを迎えては一人時計塔に赴き、固く閉ざされた扉を開くと時計塔の地下水路を探索した。今は動かない時計仕掛けの歯車を仰ぎ見ては、入り組んだ地下水路を彼は進んでいく。時折響くうめき声は、彼に「亡霊」、怪人の存在を確信させた。一夜、一夜ごとに水路の構造を把握していく彼はやがて気付く。地下水路が八角形状の空洞を水路全体の中央に形作っているのを。彼

は壁を調べていくと、かすかに変色した煉瓦の一つを見つける。閃くジファ。彼は煉瓦の接合部分にナイフで切り込みを入れ煉瓦を取り出す。すると壁面が動き、隠し部屋への扉が開く。ジファは甘美な香りの漂う室内に誘われるように足を踏み出していく。調度品、骨董の数々と飾られた美術品、室内の装飾。そして天球模型、顕微鏡、散らばる多くの実験器具は、部屋の主人の聡明さと、背徳の香りを思わせた。部屋の奥、華やかな刺繍を施されたベッドにその男は腰掛けていた。男は顔を両手で覆い、うなだれ、絶望と苦悶の間を漂う。彼の口から戯曲の長台詞が零れ落ちる。

「死に憧れる者、生に執着する者。皆押し並べて自然の奴隷でしかないとしたら？人間の意志は、崇高さは、高潔さは！まことに存在しえるのか。人の世はいかにして意味を持ち得るのか。果ては称えられるべきか。全てが無意味な気まぐれと怠慢、放恣によって決められているのなら、人の尊厳は存在しうるのか。私は気まぐれに左右される哀れな獣の一群に過ぎないのか。ならば私の嘆きよ、哀しみよ、怒りよ！どうか一つの真理に私を導いて欲しい。」

ジファは優れた表現力を持つこの部屋の主、鬱屈と心を閉ざす彼こそ、時計塔の亡霊。「時計塔に眠る怪人」であると知った。男は顔をあげると重厚な声でジファに尋ねる。

「少年。無辜なる魂。お前は誰だ。」

薄明かりに灯される男の左目は痛ましくただれていた。ジファは震える心を奮い立たせて答える。

「俺はジファ。ジファ・セラヴィナ。靴職人をなりわいにするロウ・セラヴィナの息子だ。」

男はカンテラを片手に立ち上がり、ジファに歩み寄る。その眼差しは濁りがなく、透明な輝きを放っていた。だが、ジファは彼の瞳に鈍い光と深い悲しみが刻まれているのも感じ取った。男は優雅な物腰でジファを手招きする。

「聞こう。君の探究心は何に由来するのか。単なる好奇と愚昧さからか。それとも高尚なる人格ゆえか。・・・聞こう。」

ジファは暗示に掛かったように男に近づいた。

「俺は・・・」

それが少年と怪人の初めての出逢いだった。ふと見ると伊瑠は静かに寝息を立てている。心地よい夢でも見ているのだろう。彼は微笑んで寝返りをうつた。私は彼に毛布を掛けると残っていた仕事を片づけて早々と眠りについた。翌朝、私は自宅に程近い執筆オフィスで次回作の準備に追われていた。こまごまとした資料、アカデミック読本。歴史空想小説まで多岐に渡って調べていた。次の小説は日本史に「IF」を持ち込んだファンタジー歴史小説だ。このアイデアは気楽に見ていた小学生向けの雑誌記事に触発されたものだ。それは「もし本能寺の変で信長が討ち死にしていなければ」との記事だった。その記事は五つ「IF」をあげていた。その内、私が特に興味をひかれたのが、信長は日本を統一した後、中華大陸に進軍し、明を制圧しただろうというものだった。記事の内容はさらに広がりを見せる。信長は、明の支配者となった後、ユーラシア大陸を制圧し、果てはイベリア半島にまで進軍する。そして世界帝国形成のためにスペインの無敵艦隊とも戦ったかもしれないとしていた。なかなか面白いではないか。何しろ世界帝国を作った歴史上の人物、国家は覇権を握るとともに、文明の発展にも大きく貢献したのだから。アレキサンダー、ローマ帝国、チンギス・ハン、イスラム帝国、ナポレオンなどなど。いずれも東西に別れた文化の一つにまとめて新しい文明圏を作り上げたのだ。信長もその役割を十六世紀に担っていたとしたら・・・私のイマジネーションはふくらみ、記事に熱中してしまった。おおいに日本人のプライドをくすぐる面白歴史読み物だったが、強く印象に残っていたのだ。夏芽が資料箱を重々しく抱えて部屋に入ってくる。彼は私の構想に口を出す。

「信長は戦国時代マニアにとっては英雄ですからね。西洋の科学、軍事、経済の考え方をいち早く取り入れたのも彼だ。鉄で艦船を作っていたとも言われるし、抜きんでた武将であったのも確かです。ただどうでしょう。秀吉も朝鮮出兵に失敗している。その上信長は

人格的に欠陥あった。だから多くの家臣から謀叛の標的にされていた。世界帝国どころか、日本統一さえまならなかったんじゃないかって僕は思いますよ。」

私は笑顔で応じた。

「そこはそれ、歴史ファンタジーの自由なトコでしょ？イマジネーションをふくらませて夢物語を完成させる。悪くないアイデアよ。きつと。」

「反対はしませんが。賛否両論だと思いますよ。熱心な裸留枷ファンの間では。もちろん協力は惜しみませんが。」

夏芽君の指摘はさておき私のアイデアはこうだ。貧困と飢餓に苦しんでいた明に住む陶芸家の息子が主人公。彼は科举制度を経て官僚となり、祖国を救うのを夢見ている。そこへ信長率いる日本軍が明を制圧、新指導者として君臨し始める。機転の利くその青年は信長に仕官し、信長の世界統一の野望における良き参謀となる。それと共に中華民族の再興も暗に計画する。信長の野心に心酔しながらも、日本と漢民族のアイデンティティーの狭間で揺れ動く彼。破壊と建設、殺戮と救済を繰り返しつつ領土拡張していく信長の軍勢。その青年主人公がユーラシア大陸の西の果てイベリアで見た光景とは……。なかなか面白そうではないか。自分で組み立てながら興奮しちまいたい。私は信長の政治家としての力量を象徴するエピソードの一つ一つに目を通し、プロットをふくらませていった。その時、ふと文章の文字がかすみ、読めないほどになった。文字を長時間見つめっていると文字を識別出来なくなる症状があるらしいが、それが。顔を上げると夏芽君の声も遠く聞こえる。視界に入る光景が波打っている。疲れがたまっているのか。私が頭を抱えた瞬間、現実と空想の境目が壊れるような音が私の耳をつんざいた。私が耳をふさいで俯き瞳を閉じると、現実が遠く離れていった。・・・私は気がつくとも見知らぬ街並みに放り出されていた。街に人影はほとんどない。私は戸惑いながらも、整然と区画、整備された街路を歩いていった。バランスを重視した都市の景観はどこか未来的だった。

都市計画も緻密なのだろう。とてもキレイだった。するとひときわ大きな交差点に一人、白いシャツ、黒いズボン姿の青年が嘲弄的に誰かを挑発している。彼の近くからは重々しく甲鉄板がきしむ音が響く。私は青年にここがどこなのか尋ねようと無警戒に駆け寄った。私は自分の置かれたシチュエーションを全く理解出来ていなかったのだ。その瞬間、軽やかで躍動感に溢れていた彼の仕種、表情が強張り、緊張が走った。周りを見渡すと装甲車、機動隊が彼を包囲している。ターゲットは彼のようなのだ。射出機が彼に標準を合わせ、砲撃が一斉に行われる。と同時に、ただ呆然と立ち尽くす私に青年が走り寄り、私の体を軽々と抱き抱える。次の瞬間には彼の体は地面すれすれを滑空し、弾丸を巧みに交わしながら、空に舞い上がっていた。全面硝子張りの高層ビル。螺旋を描く構造の塔。左右非対称の天井を持つ建物が目に入る。風にあおられながら、見下ろす都市の景観はアートポリスとしてのおもむきさえあった。風にたなびく青年の髪は銀髪と黒髪が入り交じり、独特の異国情緒を醸しだしている。唇は薄く、仄かに青紫に染まっている。右目は赤、左目はエメラルドグリーンに輝き、右目だけが奥二重で、多層的な人格を表しているようでもあった。青年はほの暗い陰影の滲む声で囁き掛けた。

「避難勧告が出ていたはずだ。君は危険を予知する能力に欠けている。近代人らしく防衛本能にもとる。君も例に洩れずシステムティックピープルの一人ではないのか？ 外出禁止令下の一人歩きは婦人には似合わない。」

彼の瞳は潤み、優しい笑みを浮かべた。私は少し照れ隠しに咳払いを一度すると彼に尋ねた。出逢ったばかりの青年に抱擁されて宙に舞い上がる。中々に非現実的で、メルヘンチックではないか。質問は率直だった。

「ここ・・・どこ？ あなた誰？ 命でも狙われてるの？」

「ここは格納可能防衛都市、第七新都だ。第三期極東紛争のさなかにある。極端な管理体制の下で俺は反体制分子として政府に登録さ

れている。破壊活動、要人暗殺を企む暴徒の一人というわけだ。これで理解出来たか？」

彼の説明は簡潔だった。ただし、私の疑問は収まらない。これは妄想か、幻覚か。私は白昼夢を見ているだけなのか？私は矢継ぎ早に彼に問い掛けた。

「あなた名前は？今は西暦何年？私の故郷東京はどこ？あなたもちらん東京は知っているでしょ？」

青年は涼しげに遠くを眺める。

「西暦？それはいつの時代の話だ。今は・・・OLG167年。人類が衛星メロウにコロニーを建設して植民を開始して以来の年号だ。」

私は耳を疑った。衛星メロウ、OLG167。それらは全て私が既刊書のスペースオペラで使用した設定だからだ。私は現実とフィクションの区別がつかない妄想にでも追い込まれたのか？青年は楽しげに青空を舞いながら答えた。

「東京。東京は知らないな。ただ自分の名前は知ってる。」

涼しい風が吹き抜けていく。青年の瞳は爽快さに満ち溢れていた。

「俺は・・・俺の名前はジファ。ジファ・セラヴィナ。」

名も無き鳥の一群が翼を羽ばたかせ、遠のいていく。私はただ黙りこみ言葉を失った。ジファ。ジファ・セラヴィナ。その名前は間違いなく私の寓話、伊瑠への子守歌代わりの物語に登場する主人公と同じ名前。時計塔に眠る怪人と心通わす少年と同じ名前だったからだ。私はジファの顔を覗き込んだ。彼の顔は涼しげだった。透き通った顔立ち、超俗的でもあった。白い肌、中性的な面差し。私のイメージと一致する特長が際立つ。色違いの眼球、奥二重の右目。銀髪と黒髪の混じり合った髪。細かいデイトールも私の趣味嗜好に近い。私はつぶさに彼の顔を観察した。ジファは楽しげに話し掛ける。

「男の顔を品定めするのが趣味なのか？男も女も仮初めの姿形に翻弄されてると本質を見失う。気をつけた方がいい。」

そう言つて彼はカラカラと笑い声を立てた。案外陽気な男のようだ。彼はひときわ力強く私の腕を握り締めると飛び立つ速度を増していく。彼は呟いた。

「国務部隊の顔貌照合を経て君の生体構造は情報登録されたはずだ。国政方針を拒絶するA級不穏分子に感化された要注意人物として君は追われるだろう。しばらく保護させてもらうよ。」

「どこへ？」

「俺の活動拠点の一つだ。」

私はとつさに閃いた。いや妥当だというべきか。彼に尋ねる。

「それつて「琥珀の広場」？時計塔の地下水路？」

彼はいぶかしげな表情を見せた。

「正解だ。なぜ分かった。君は内部情報に精通しているフリーライターか何かか？それとも俺の身辺調査をする政府のスパイ？」

途端に彼は表情を一変させて艶やかな笑みを浮かべた。

「俺の見当違いだ。用意周到であるべき職務の人間が、不用意に戦闘現場をうろついてるはずもない。それに……。」

彼は少しためらった後、私から視線を逸らして口にした。

「無邪気な顔をした女の子が危険な任務に服しているとも思えない。……俺も、容姿に振り回されているのかな。」

女の子？失礼な。私は曲がりなりにも経済的に自立したシングルマザーだぞ。顔が幼いせいとか？童顔といえども限度があるだろう。

大人げなく、すねる私を横目に彼は最後に、少し修正した。

「「地下水路」は間違いだ。君の情報源には若干の誤りがある。琥珀の広場、時計塔界限には広大な領域の地下街がある。無秩序で複雑に入り組み、無計画に増殖した居住エリア。その外観はさながらラビリンスだ。政府の方針に同調しない人間、反発する人間の格好の潜伏先になっている。政府関係者も日に日に変貌する地下街の全容を把握しきれないはずだ。それとも、必要悪の一つ、組織だった活動の出来ない一団だと見限っているのか。あるいは絶対的な監視下でコントロール出来ると思っているのか。真意は掴めない。」

ほら、見えてきた。あれが・・・琥珀の広場だ。」

私は「この場所」の戦争の原因。現在の政治体制、政府と反政府勢力の対立。彼の活動、彼の特殊な身体能力。私は「今」何を知覚しているのか。そして何より・・・時計塔には、「ファントム」、怪人が眠っているのかどうか。尋ねたいことはたくさんあったが口をつぐんだ。私はしばらくこの境遇に甘んじるしかないと思えたからだ。眼下に見渡せる琥珀の広場は私の空想と似て、紫紺と赤褐色の石畳で半円を美しく形作っていた。広場の中央に立つ時計塔は二つの扇形の土台に支えられ三層構造になっていた。一段目は擦じれた棒状の装飾が華やかな造形美を見せている。二段目は薄紅で色付けされた大陸地図が彫り込まれている。そして不遜な笑みを浮かべる太陽が描かれていた。六面に分割された三段目、四つの平面には波状に曲がった時計が置かれ、針は止まっている。残り二つの面にある時計の時針、秒針はS字型で、私には読めない鏡文字で書かれた時刻を指して、動いていた。ジファは私を抱えて軽く地面に舞い降りた。そして私を琥珀の広場の片隅にある釣鐘形をした入り口へと案内した。彼は妖しげな笑みを浮かべる。

「第七新都の貧民窟。地下街、ラビリンス。アウトサイドへの入り口だ。」

私は彼に連れられて曲がりくねった通路を降りていった。何度も曲線を描く通路を歩いている間、ジファと私は押し黙ったままだった。やがて二人は淡い光の射し込む出口へと足を踏み出した。そこが時計塔の地下街だった。一目見たただと地下街は商店の立ち並び賑やかな繁華街にも見えた。でもすぐに私はこの地下街の異質さに気付いた。行き交う人々の目が淀み、どこか妄執的で退廃の香りが溢れていたのだ。彼らは私に視線を向けては関心を失い、内面の官能に酔っている。私は強い警戒心を抱き、ジファの服の裾を握った。彼は私の気持ちを敏感に感じ取り、優しく耳元に囁いた。

「大丈夫。ここの住民は表面だけでは計り知れない。個人主義的で利己的な一方、思想的には高潔で、改革的精神に満ちている。彼ら

は君が嫌うような腐敗した人間じゃない。じきに分かる。一面的な判断基準など表層を撫でるだけの偏見でしかないのを。」

そう言うジファは自信に満ち溢れ、彼特有の気品を漂わせていた。ジファは人込みをかき分けて、尖塔と建物の間、細い裏通りへと紛れ込んだ。路地裏は菱形の石材が敷き詰められ、幾つもの方角に枝分かれしている。まるで地下街の無秩序振りとい帳面さが混ざり合っているようだった。そこはラビリス。正にその形容が相応しかった。建物の壁には幾何学紋様を組み合わせたペイントアートが描かれている。時折すれ違うヴェールで口元を覆う女性は娼婦を思わせた。ただ私は邪推をしなかった。ジファの言う通り、私の思い込みかもしれないのだから。路地はより込み入り、狭まっていった。幾つもの道が交差している。やがて私達は赤煉瓦を積み上げた建物に辿り着いた。建物は情緒的でありながらどこか寂しげでもあった。ジファは笑顔を見せると、軽やかな足取りで私の手を引き、赤煉瓦の建物の階段に近づいた。彼は言う。

「さあ。俺の知性と野性の本拠へとご案内だ。」

ファントム 2

煉瓦の建物、一つ一つ踏み締める階段は幻惑的な音を響かせていく。私は沸き上がる愉悦を噛み締めていた。最後の石段を降りると灰色にくすんだ通路が一直線に伸びている。壁には部屋の扉が幾つも向かい合う。天井の蛍光灯は明滅を繰り返し、蛾が粉を撒き散らしながら、まわりついている。ジファは褐色の扉、（塗装がところどころ剥げ落ちている）に近づくにつけて指紋と顔貌の照合を終えた。セキュリティは案外シンプルらしい。扉は音もなく開き、ジファと私を招き入れる。室内は思いのほか片づけられていた。部屋の中央に銀色の楕円卓が置かれ、その周りには花飾の椅子が三脚あった。書棚には適度な読書量を思わせる本が綺麗に収められている。窓際のテーブルにはキーボードが一つ。そしてホログラムモニターがあった。彼の情報源、集めたデータ全てが保存されているのだろう。また部屋には熱帯魚の立体映像が浮かび、白い壁に飾られた額縁には静物画が収められている。私が想像する「時計塔の怪人」の隠し部屋と似通っているのはその絵画一つだけだった。ジファは私を部屋に置き去りに、コーヒーを煎れると言い残してキッチンへ向かった。私は私で室内を観察してまわり、透明な水溶液で満たされた特殊なカタチの水槽を見つけた。一センチ程の大きさのニューロンとシナプスが結合と分離、増殖のプロセスを繰り返している。その使い道、システムは私には分からなかった。やがてコーヒーカップを両手に持ったジファが私の隣に立った

「人工知能のシミュレーションモデルだ。人間の神経細胞は経験、学習を繰り返して新しい行動、思考様式を手に入れる。人工知能も同じ仕組みだ。単純な計算、判断を重ねる内により高いレベルの働きをするようになる。最終的には意識、心、精神さえ形成するの也有可能だ。人間の脳の働きは単なる化学的、電気的反応の一つに過ぎないというわけだ。」

ジファは私を椅子に座るよう促した。彼はコーヒーを口に含むと呟いた。

「ただ、その解釈が全ての悲劇の始まりでもある。」

彼が細めた瞳は冷淡で酷薄、残虐なおもむきさであった。一転、彼は少年のようなあどけない表情に変わり、好奇心にまかせて私に尋ねた。

「ところで君は、なぜあんな危険区域にいたんだ？武装もしてないし、武器も持っていない。無防備で思慮に欠ける。計画的じゃない。突発的で気まぐれだ。一体何をしてたんだ？」

私は口ごもった。私自身、何が起きているのか良く飲み込めていないのだ。私は黙り込んだ。ジファは意外に淡白だった。

「答えたくないのならそれでいい。人間、秘密や隠し事の一つや二つはある。いずれにしても君は政府直属の諜報機関に標的にされるだろう。誰かの保護が必要だ。俺と行動する方がいい。多少居心地が悪くとも納得出来るか？」

私は小さく頷いた。

「名前は？名前さえ明かせない秘密主義者か？まさかA君、Bさんと呼び合うわけにもいかないだろう。君の名前は？」

「裸留枷。優那裸留枷。」

「ユウナ・ラルカ。変わった名前だな。良く覚えておくよ。」

私の意識は沸き出るいくつもの疑問で収拾がつかなかった。少しパニックに陥った私の口から衝動的に一つの質問がついて出た。

「・・・怪人。琥珀の広場。時計塔の地下に眠る怪人について何か知らない？あなたの知り合いか親友か。それとも仲間か。」

私も唐突な質問であるのは分かっていた。それなのにジファの顔は「怪人」という言葉に敏感に反応し、カゲリが射した。彼は言う。「そう呼ばれる男のことは良く知っている。なぜ君がそれを？」

私は現実と非現実の境目が崩れていく奇妙な感覚にとらわれた。閃きにも似た強い衝撃が私の体中を駆け巡った。私は断片だけでも私の知っている事実を打ち明けた方がいいと思った。

「私、「怪人」についてよく知ってる。彼が迫害された理由も。私はあなたのことも知っている。ジファ、あなたと怪人の関係も。なぜって全て私が創り出したものだから。」

ジファにとつては荒唐無稽な話に聞こえただろう。彼には空想とリアリティの一致など非現実的であるに違いないからだ。彼は彼の世界で生きている。私はその世界に紛れ込んだだけなのだ。彼からすれば私は妄想家に見えただろう。ジファは不信感を露わにした。

「何を言ってる？俺と彼の関わりを把握しているのは諜報機関「秘匿情報管理課、略称AMSSOI」と「汎用科学技術協会」そして軍、国家軍略機構、政府の上層部だけだ。君の告白が真実なら、俺達二人は敵対関係にあると想像出来る。どこまで知っている？返事次第では君と俺は離反せざるを得ない。最悪の場合は・・・。」

私は真摯に彼を見つめた。私の境遇を理解してもらおうと懸命だったのだ。

「怪人、彼が迫害された理由、それは彼が癩病患者だったから。彼は無理解な市民の恐怖心に追い立てられて時計塔に逃げ込んだ。長く時計塔の地下の隠し部屋に潜み、「時計塔に眠る怪人」と呼ばれるようになった。違う？」

瞬間、ジファの顔から緊張が消え、頬が緩んだ。彼は自身の疑いが杞憂に終わったのに安心していうようだった。

「裸留枷。君はたいそうなストーリーテラーだ。ファンタジーとして良く出来てる。ただ残念ながら事実と異なる。君の推測は妄想に過ぎない。安心したよ。裸留枷、君は事情に通じていない。俺と彼の関係についても見当違いな憶測だろう。」

私は戸惑うと同時に拍子抜けした。私の寓話とこの幻想世界との絶妙な一致は単なる偶然でしかない？私の誇大な想像力とイマジネーションが混ざっただけ？なら、今私が知覚しているこの空間も、白昼夢か幻視？私は気負いが取れてリラックスした。そして私の作り出した物語の登場人物の名前をスラスラと並べ立てた。

「そうね。きっと私の思い違いね。私って職業柄思い込みが激しい

ところがあるから。あなたを動揺させてゴメンね。二人の緊張関係はめでたく解消。じゃあ、琥珀の広場で処刑された王族カルツアなんて男も、あなたを助け出そうとする司祭ステファリなんて男も実在しないのね。怪人の名前もオルザヴァじゃないんだ。創造力がたくましいのも考えものね。良かった。」

笑ってコーヒーを嗜む私を見つめるジファの顔つきが一変した。彼は再び深い疑心にとらわれていた。

「カルツアも、ストルツアも・・・存在する。彼らは王族でもなく、司祭でもない。カルツアは謀殺された科学者。ステファリはAMSO SIの最高幹部だ。どうしてそんな機密事項を知っている？それに・・・怪人の名前は正しく・・・、オルザヴァだ。裸留枷。君は何を知っているんだ。君は一体誰なんだ？」

私は固まった笑みを浮かべてひたすら呆然としていた。きつと間の抜けた顔をしていたに違いない。私は聞いた。

「・・・どうなってるの？」

その時、ジファの目つきが変わった。私の言葉をさえぎって私に沈黙を強いた。けたたましい足音が戸外に響く。私は小声で囁き掛ける。

「どうしたの？」

「AMSO SIだ。長く潜伏先として最適だったが探知されたらしい。慌てないでいい。別室へ。」

彼は私を隣室へ連れていった。部屋の外では何やら指示を出す指揮官の声が響いている。隣室には電磁気を放電する球形をしたオブジェが飾られていた。ジファは二センチ程の大きさをしたソレノイドをオブジェの凹版にはめ込んだ。すると壁面全体を飾るスクリーンが植物の孔辺細胞のように開いた。ジファが私の手を誘い出しスクリーンの奥の通路に飛び込む。するとスクリーンは音もなく閉じ、すれ違うように銃弾の乱射音が鳴り響いた。私はジファのエスコートのまま逃避行へと赴いた。ジファは寡黙を通しながらも一言呟いた。

「君の手引きでないのを願うよ。」

私はジファが根拠のない信頼を私に寄せているのに気付いた。私は口をつぐみ、私の細い腕を優しく引き寄せるジファの背中から離れなかった。二人は絡み合う導線のように入り組んだ通路を進んだ。通路は白銀色の光を反射させる水路へと通じていた。出口へと進みながらジファは尋ねた。

「カルツアをなぜ王族だと？ ストルツアを司祭だと決めた理由は？ まるで前近代的なお伽話だ。それに・・・君が全て創り出したとはどういう意味だ。それには俺も含まれているのか？」

「私も良く分からない。自分でも状況が掴めてないの。ただ子供の為に作った寓話と共通点が多過ぎたから。」

「子供？ 裸留枷。君は子供がいるのか？」

「うん、どうして？」

「別に。そう見えないだけだ。」

私はふと水路に揺れる水面を覗き込んだ。そこにはまだあどけなさの残る、瑞々しい顔をした私が映っていた。なんだ？ まるで十代の少女だ。適度に大人の女性の魅力を持っていた私はどこに行ったんだ？ ジファが「女の子」と呼ぶはずだ。私はこの世界の原理が理解出来なかったが、とりあえずは適応することにした。だって楽しいじゃん。十代に若返った私。端整な顔立ちの美青年とのレジスタンス。我ながら能天気、危機感の欠ける奴だ。私は少し上機嫌になってジファに聞いた。

「ジファ。あなたのお父さんの名前はロウ・セラヴィナ？ 職業は鞆職人？」

ジファは階上へと繋がるハシゴを登りながら答えた。

「俺の父親は鞆職人じゃない。脳生理学者だ。汎用科学技術協会の一員だった。」

私は少し胸を撫で下ろした。そこまで一致するはずもないか。幾ら何でもね。ジファと私がハシゴを登りつめると、そこは露店の立ち並ぶ街路の裏通りだった。私の体を引き上げるジファが一言付け

添えた。

「ただ・・・名前は合ってる。俺の父親はロウ・セラヴィナだ。」

その表情には蒼い憂いがさしていた。私は戸惑いと高揚感で複雑な心持ちにとらわれていた。明らかに私のフィクションと、この謎めいた世界には関係がある。すると考える間もなくジファが露店通りへと踏み出していく。私は慌てて後を追った。露店には野菜や果物。織物や衣服。貴金属で作られた装飾品、いかがわしげな薬、多彩な花々などが売りに出されていた。ジファはその一切に関心がなさそうに私を先導した。私は華やかなかんざしを差し、東洋的な絹織物に身を包んだ女性の一派に視線を奪われ、魅了された。それなのに足早に先を急ぐジファについていかざるを得なかった。ジファは思い詰めてふさぎ込んだ様子だった。私は彼に尋ねた。

「目的地はどこ？逃亡先を決めてる？抵抗組織の活動拠点かどこか？追ってきたのはAMSOSSIだけ？彼らの襲撃に仲間を巻き込んでしまうんじゃない？あなたの身体能力があれば彼らを一扫出来たんじゃない？」

ジファは淡々として冷たい口調だった。

「一つ一つ質問に答えていくか。少し黙ってくれと一喝するか。どっちがいい？」

私も大人げなく少しふてくされて愛想なく応じた。彼に助けられているのも忘れて。

「丁寧の一つずつ解答。」

「目的地はサロンの役割も持つ酒場だ。逃亡先は決めてない。俺の計画の始動させるために理解者の潜伏地を点々とする。ただそこは抵抗組織の活動拠点じゃない。彼らと親交はあっても俺と彼らは独立した関係にある。追ってきたのはAMSOSSI、正解だ。良く覚えられたな。次の質問の答え、俺の知人は常にAMSOSSIの脅威に晒されている。俺がいよいよといまいと関係ない。そして最後の質問への答えだ。俺の身体能力があれば彼らを一扫出来たかって？出来ただろう。ただ君の安全を保障出来なかった。満足出来たか？俺

にも少し考えるゆとりをくれ。君の空想物語と現実が一致するのを俺も奇妙に思ってるんだ。君自身、戸惑ってるだろう。」

私は頷くと同時に、彼の一見冷たい人格に優しさも同居しているのが分かって嬉しかった。事実、私の寓話「時計塔に眠る怪人」のジファはそういう少年だからだ。私は闇雲に憶測するよりも、このシチュエーションを楽しもうとした。それが解決策の一つになると感じたからだ。考えても答えは出ない。そう感じたのだ。やがて私達二人は通りの一角にある、銀細工の建物に足を運んだ。建物のネオンが女性の耽美な指先をかたどっている。ここがジファの言う酒場だろうか。サロンの役割も果たすという。私は店の雰囲気想像を膨らませた。二人が入った店内は貴族趣味とネイチャリストの趣味が混ざったような特有の美意識を持っていた。植物がアール・ヌーヴォーを思わせる装飾性をそなえ、その植物が絡みつく床下、天井、柱全体は水槽になっている。水槽を泳ぐのは遺伝子改良でもされた新種だろうか。見たこともない不思議な鑑賞魚ばかりだった。ウェイターはどこか格式張っていた。お店の趣向だとすれば徹底している。店の奥のスクリーンで流れているのは・・・どうやら戦時報告映像らしい。戦争のニュースを淡々と告げていた。少し無機質にも聞こえる女性アナウンサーの声が響く。

「深閑間基地から出撃した爆撃機の一団は艦船ベガを空母とする空軍連隊とオビル砂漠で合流、更に空中給油を経由した別部隊と連携大戦隊を編成し、敵陣、枢要軍事施設八ヶ所を空爆。多大な戦果を挙げた模様。国防省は今作戦の従軍パイロットの勲功を称える声明を発表。臨戦態勢の継続を示唆した。」

戦争報道はプロパガンダそのもので、ジャーナリスティックな批評精神に欠けていた。ただひたすら機械的に戦況を報道している。そんな印象だった。ジファは何かを考え込みながら、奥まった場所のソファに腰掛けた。私は特別ジファに話し掛けることもなく店の雰囲気を満喫しながら彼の隣に座った。客の一人一人を観察すると、一人一人が酔いすぎないほど、適量のアルコールを嗜んでいる。だ

けど議論や討論を交わす「サロン」の装いはない。個人主義的な価値観、孤独が染み渡っている。自動演奏のグランドピアノから流れる静かな旋律が彼らの孤立感を際立たせていた。ウェイターはジファの持て成しに手慣れているようだった。ウェイターは赤紫の酒類と見慣れない甲殻類の料理をテーブルに置くと会釈をして立ち去った。ジファはグラス一杯分の酒を喉に流し込み、ソファに背をもたれた。すると彼の目線の先、二階席へと続く螺旋階段から一人の女性が降りてきた。彼女のミドルヘアの髪先は軽く波打っていた。キレイな黒髪には金色、赤茶色、灰色の髪も混じっている。彼女がラフに着こなす琥珀色のシャツには、水辺で番傘をさす少女が描かれていた。彼女は鮮やかで、美しい、くすんだ緑色の瞳をしていた。奇抜なファッションの彼女は同性の私から見ても魅力的だった。彼女は私を無関心に一瞥するとジファの隣にすわった。二人は視線さえ合わせずに言葉だけを交わす。彼女の声は乾いていて凜々しかった。

「第五区画、第二次産業地域、A75居住エリアの反政府グループが一斉検挙された。国連大使の訪問に合わせた迎賓館占拠を計画している矢先だった。内通者がいる。政府も関連組織の一斉淘汰を目論んでいる。状況は刻一刻と加速度的に進行する。戦争の終結、和平プロセスへの移行は望めそうにない。ジファ、あなたの手助けが必要よ。単独行動では限界があるでしょう。あなたの動機が個人的ではあっても、私達の標的は同じ。協力するのはいいアイデア。同志として活動するのも不本意ではないでしょう？」

ジファは冷淡だった。彼には政治的情熱、変革の意志というものがない。そう私の目には映った。

「悪いな。組織だった活動には関われない。俺は反戦が目的じゃない。俺の行動は報復の原理に基づいている。時にエゴイスティックですらある。共闘すれば抵抗組織自体に損害を与える可能性があるだろう。お互い適度の距離を置いた方がいい。俺は汎用科学技術協

会の機密を知る暗躍者。政府にとっては抹殺が至上命題。俺が抵抗運動に関わるほど、弾圧が本格化する。俺は国賊として脅威なんだ。

「女性は一瞬に笑みを浮かべた。朱色に染まる薄い唇は仄かに潤っていた。」

「技術協会の機密は最早あなた自身ではないかしら。極限にまで拡張された身体能力の由来に見当がつくのは国家権力以外にないだろうから。」

ジファは彼女の言葉に興味がなさそうだった。

「それはどうだろうな。それよりAMSSOIの動きが活発になっている。俺の本拠の一つが襲撃された。俺も目的を一つずつ遂行していく。幾つか潜伏先を確保してくれないか。」

「交換条件は？」

「AMSSOIの戦略パターン、電子空間における彼らのネットワークの提供。不足か？」

「充分。」

ジファは冷酷に呟く。彼の瞳は鈍く鋭い輝きを放っていた。

「いよいよ「怪人」の復讐劇の始まりだ。」

私が息を潜めていると、ミドルヘアの彼女が気さくで愛嬌のある調子でジファに聞いた。

「ところでこのお嬢ちゃん是谁？」

お嬢ちゃん。確かに若い頃の私は童顔で中学生によく見間違えられたが。私はこれでも子育て、仕事を両立するキャリアウーマンだぞ。ジファが答える。言ってやって、言ってやってジファ。

「俺も良く知らないんだ。外出禁止令時、俺と機動隊との交戦下に現れて……。A級不穏分子に登録されたはずだから、しばらく俺がかくまっている。名前は裸留枷。優那裸留枷。不思議な力を持っているね。驚くよ。」

彼女は親しげに私に握手を求めてきた

「よろしくね。裸留枷ちゃん。」

私はとつさに閃いて彼女に言った。

「あなたジファの幼馴染みでしょ？彼に仄かに恋心を寄せていて、名前はローズ・ジニー。趣味と特技はキルト織りと時計細工。当たつてる？」

彼女は野性と理性が織りなす美しい顔立ちを少しも崩さなかった。「私とジファは幼馴染みじゃないわ。出逢ったのは数年前。それに趣味と特技はキルト織りでも時計細工でもない。」

私は彼女の細く綺麗な手をしっかりと握った。若干気落ちしながらも。それでいて私は彼女の言葉を聞き逃さなかった。

「ただ、名前は合ってる。どうして？」

ジファが愉快そうに足でリズムを踏んだ。

「なっ、不思議だろ？」

当惑する彼女。ローズ・ジニーをよそに私は声を出して笑うしかなかった。

「アッハッハッハ。」

酒場のピアノの旋律と私の演技がかった笑い声が絶妙のハーモニーを奏でていた。ローズ・ジニーは立ち上がり、彼女の案内で私達は螺旋階段へ向かった。ローズ・ジニーとジファは気心のしれた様子で談笑し、笑い合っていた。互いの利益が保障された上、方向が一致したせいで、二人の殺伐とした気持ちが落ち着いたのだろう。私は少し安心しながらも（だって怖いんだもん。この二人）ちょっと嫉妬心に近い感情も芽生えていた。失敗した。ローズ・ジニーとジファをこんなに親密にするべきじゃなかった。現実に戻ったら寓話の構成を変えよう。二人に喧嘩させて仲違いさせよう。そして異国から訪問してきた私がジファと仲良くしよう。そんな大人げない発想を巡らせながら私は二人の背中を追って行った。

ファントム 3

三階フロアに到着すると一人の小柄な、猫背の男が立っていた。

風貌はどこか浅ましい感じがした。ただ狡猾で処世術、世渡り術には長けているようだった。私はこのシビアな世界の裏社会を軽妙に生き抜く知恵を彼に見出した気がした。男はジファを見とがめると早速低姿勢で歩み寄り、交渉を持ち掛けてきた。

「ジファ。レジスタンスに協力せずに活動基盤を拝借しようなんて都合が良すぎやしねえか。俺の情報網は広くてね。もうお前の拠点の幾つかは制圧された。言わばお前はAMSSOIの籠の鳥だ。足がつくのも時間の問題だ。いいや！分かってる。ローズと取引が成立したのは。ただそれは俺にとっちゃ面白い。政治理念を共有しようなんて無理は言わねえ。ただ宰相ノルガバの拡張戦争の理論は支離滅裂だ。おまけに何を狙ってるのかも分かりやしない。だからだ！反体制運動に加わってる組織や個人をお前さんが拒否するのは妙案ではないね。利己的な人間が俺は嫌いだ。お前が単独行動を貫き通すなら、俺はAMSSOIにお前を売り渡すかもしれない。これはテイのいい脅迫だ。俺の行動範囲の広さ、フットワークの軽さについて知らないわけじゃないだろ？」

ジファは冷静だった。この猫背の男もあくどい人間ではない。多少あざといだけなのだ。

「ギヤド。要求は？」

「一週間ごとに現金で一千万クローン。出せない額じゃない。相互扶助で持ちつ持たれつだ。」

ローズ・ジニーが仲裁する。

「ギヤド、無闇な干渉はやめて。情報屋のあなたが抵抗運動に共鳴してくれているのは嬉しい。ただジファは敵対者じゃない。自分の方法が私達と相容れないと思ってるだけよ。彼も最後には政府中枢の機能停止を狙っているんだから、ターゲットは同じ。トラブルが

生じるはずもないわ。」

弁護するローズ・ジニーを押し退けてジファは一步足を踏み出した。

「一千万クローンでいいのか。」

「ああ。」

「今、光センサー透過チップを渡す。俺の口座に六千万クローン程保管してある。時宜にに応じて下ろすといい。」

ギャドは満面の笑みを浮かべた。

「賢明な判断だ。その姿勢があれば、アウトサイドでも、暗黒街においてでさえも生きて行ける。よくよくも聡明な男だ。」

ジファはしたり顔のギャドに歩み寄ると、瞬間、小型の針を彼の首筋に刺した。慌てふためいて後ずさりするギャド。手足が震えてるれつが回らない。

「な、何を・・・！？」

ジファは事も無げに言った。

「大脳の言語中枢を麻痺させる特殊な化学溶液を注入した。一ヶ月から一カ月半程度言語駆使能力が停止するだろう。小脳も機能不全に陥る。体の均衡感覚が失われ、正常な生活は出来ない。独立看護師でも雇って看病してもらうといい。ギャド、お前が快復する頃には俺のプランも完結する。その時は一緒に祝杯でもあげよう。」

ギャドはふらついて膝から崩れ落ちた。

「おま・・・え！」

酒場のスタッフがすみやかにギャドを介抱し、カプセルに収監すると運んでいった。彼らはトラブルをトラブルとも思わないのだろう。思惑の入り乱れる「サロン」。ここはそういう場所なのだ。私は平然と立ち去るジファに危ういアンモラルな香りをも嗅ぎ取っていた。ローズ・ジニーが私達二人にあてがってくれたのは美術館の天井部屋だった。部屋は酒場から空中回廊で繋がれていて互に行き来できた。天井部屋、「美術館のアトリエ」はキャンバスや画材道具、モチーフの数々、デッサンの多くで散らばっていた。白い壁

はアトリエを澄みきった印象にしていた。それはこの天井部屋の主人、画家の心の平穏を保っているようでもあった。ローズ・ジニーは簡潔に言った。

「アトリエの主人は絵の素材を求めて放浪中。しばらく帰らない。ジファ、あなたが計画を実行する段階になったら一声、声を掛けて何も言わず命を危険に晒すのはあなたの悪い癖。お願いね。」

そう言い残してローズ・ジニーは席を外した。本当に洗練された女性だ。女性という性別に甘んじる事もなく、過度にフェミニステイックな要求もしない。バランスのある安定した女性だった。ジファはキャンバスの一つを抱えあげると私に尋ねた。

「どう思う？」

キャンバスには様々なカタチの文字、多国籍の言語が並べられているだけだった。その「絵」は青紫色を土台にしていた。実験的抽象画。私はそれ以上の感想は抱けなかった。文章の一つがアルファベットで書かれていて、読み取れる。

「林檎は食べられる。林檎は栄養素を多分に含む。林檎を食べる人間は健康体を維持出来る。・・・ジファ。何これ？」

ジファはキャンバスを画架に立て掛けると言った。

「人工知能の分析だよ。このアトリエの主人とは親交が深くてね。俺のアイデアで絵画を幾つか描いてくれた。」

「この抽象画も？人口知能の解析？どういうこと？」

ジファは落ちて着いていた。まるで思索家だった。その表情は彼の抱く暗い計略と相対しているようだった。

「人工知能の言語読解力をつくり上げる基礎は演繹法、三段論法から始まったんだ。そう、この林檎に関する文章のようにね。食べられる林檎。栄養素を含む林檎。その林檎を消化吸収する人間は健康体になる。この三つの意味を三段階に分けて人工知能に理解させた。単純なものだよ。」

私は彼が何を言っているのか理解出来なかった。人工知能について彼が話するのはこれで二度目だ。何か彼に関わりがあるのだろ

うか。彼は続ける。

「人工知能の更なる発展には言語解析学と認知科学の発展が必要だった。研究初期においては、当時としては最高峰の知性を持つ技術者達が共同研究に参加した。彼らは文字列を区切って、一つ一つの単語を機械に理解させ、一つの文章が文法的に正しいかどうかを判別させる作業を行った。「形態素解析」という奴だ。これが予想以上に手間の掛かる作業でね。名詞、助詞、動詞など品詞ごとに分類してその意味を人口知能に理解させなければならなかった。人口知能の開発なんて初めは可愛いものだったんだよ。皆が無邪気に熱中し、人間の思考プロセスをどこまで再現出来るか期待に胸を膨らませていたんだ。親父もその無邪気な科学者の協力関係に憧れて汎用科学技術協会に入会した。・・・それが大きな災いをもたらすものだとは知らずに。」

私は何気なく彼の父親について尋ねた。

「殺された科学者カルツアとあなたのお父さんは同僚？研究仲間だったの？」

ジファはしばらく考えて答えた。

「そうだ。お互い国家軍略機構の意向にそぐわなくてね。目の敵にされていた。理想主義的な学識者など国家にはいないというわけだ。」

「汎用科学技術協会っていうのが開発、研究していたのは人工知能だけ？何か・・・問題か？」

「軍事、経済、社会活動、あらゆる分野において文字通り「汎用」出来るテクノロジーを進歩させていた。人工知能のセクシオンに配属されていたのが、親父、カルツア、後数名の科学者兼技術者だった。」

そう言うときジファはもう一枚の絵画を私に見せてくれた。それらは螺旋構造をしたDNAのカタチを使って女性の肖像を描いたダブルイメージの絵画だった。構成が素晴らしく完璧に近いクオリティだった。この絵には絵画にうとい満足出来た。

「これは？」

ジファは確信犯的な笑みを浮かべた。

「膨大な量のヒトゲノムが解析されて、人類が望んだのは知的、運動、創造能力の覚醒。病の根絶。そして延命だった。事実、塩基配列を組み換え、生体を再構成すれば、超人的な能力を持つ人間を作るのも可能だった。・・・ただしその遺伝子改良をほどこすには人間の知性をはるかに凌ぐ知性体が存在しなければならなかった。少し情報の断片が繋がって来ただろう？」

「良く分からないわ。」

「ならそれでいい。おいおい、明らかになるだろうから。」

ジファは私に近づくと半透明のシールを私の首筋に貼り付けた。彼は説明した。

「このシールを首筋に貼っておくと、微量な電気信号が脳内に伝達され映像を喚起する。俺の首筋と通信性を持っていて、俺には君の動向が、君には俺の動向が把握出来る。君と常に行動するわけにもいかない。同時に君の気まぐれにも任せられない。俺には君を保護する責任がある。君の秘密の謎解きにも興味があるからね。」

「二人はいつも一緒というわけね。」

「そう。うら若い乙女としてはもつとスタイリッシュな男が良かったか？」

「アッハッハッハ。」

ジファも微笑んでアトリエから離れた。私は初めの抽象画。文字が羅列された絵画を眺めた。すると不思議で気味の悪い立ち眩みが私を襲った。私はこめかみを抑え、頭痛に耐えた。この感覚、良く似ている。良く覚えている。あの時、あの時と一緒に。文字が認識出来なくなり、この空間に移された時と一緒に。私は目を見開くと絵画の文章を読み解こうとした。文字が解体し、無意味な線の重複にしか見えない。私は痛みを感じ、苦しくなって目を閉じた。遠く・・・意識が離れていく。気がつくと私は再び自分の現実、執筆オフィスの椅子に腰掛けていた。目の前には陽気にポップソングを

口ずさむ夏芽がいた。私は気の抜けた口調で彼に呼び掛けた。

「夏芽君？」

夏芽も気の抜けた顔をしていた。

「どうしました？何かありましたか？裸留枷さん。」

私は彼の何気ない言葉で自分が現実に戻ってきたのがわかった。

私の日常は平和で、ジファやローズ・ジニーが発散していた緊張感とはほど遠かった。窓の外からは雀のさえずる鳴き声が響いてきている。私はとりあえず、何事もなかったように取り繕い、小説の資料をめくっていった。外はとても穏やかな陽気だった。

冷血 1 優那裸留枷

物凄い効果音だ。ノイズと電流の進む音、亜熱帯地方の鳥の鳴き声にも似た音が混ざったS Eが舞台上に響き渡る。舞台装置も細かいディテールに凝っていて斬新で奇抜。舞台両脇には三メートルほどの大きさの、女性のデスマスクが置かれている。そして筒状の鉄管が女性の顔に巻きついて彼女の口を塞いでいる。舞台中央には解体された懷中時計が砂丘に埋もれて時を刻む。舞台美術は白銀色をした裸婦像だった。美しい体を晒す女性がしなやかな媚態を示し、まゆの中から今にも姿を現そうとしている。さらに色とりどりの紋様のチョウチョウ、極彩色に染まるトンボ、光を明滅させる蛍などの昆虫が、硝子張りの近代的尖塔に向かって飛び立っている。美術の両隅には三つずつ鏡台が立て掛けられていて役者達の姿を映し出している。客席で煙管を吹かして、愉悦にふける音々がハスキーな声で演技指導をしている。彼女の要求は動きから発音に至るまで細密で事細かく、具体的に何より細心の注意が払われていた。役者たちは、この若干、アンモラルな雰囲気を漂わせる現代演劇の旗手に心酔していた。だが同時に彼らは自分の意見をも口にしていった。意見交換は活発で民主的な舞台作りが心掛けられているらしい。私と言うとあの出来事、私が確かに経験したあの現象について音々に相談しに来ていた。音々も私と同じクリエーター。創作に行き詰まると心のバランスが崩れて幻視でも見るのかと確認でもしたかったのだ。私は音々より八つ程座席を隔てた椅子に腰掛けて、舞台上の稽古の風景を眺めていた。音々は片目を見開いて特有の雅やかさを振りまく。彼女は煙管の煙を宙に吐き出すと私の隣に腰掛けた。「で、どうなのよ。もどかしい恋心？子育ての悩み？創作の行き詰まり？私を霊媒師並みにあてにしてきたの？何か相談事があるんでしょう？」

私と音々は遠慮する間柄ではないが、話の内容が余りに突飛なの

でマトモに取り合ってくれるのか私には気掛かりだった。私はしばし口ごもった後、淡々と話を始めた。音々は夢現の状態で舞台の隅々に目を配り、演出家としての仕事を全うしていた。私の話の中頃になって音々が気付いた。

「えっ？あんたもう話始まってたの？あんたそんなぼつーと一人語りする女だったっけ？もつと覇気出せよ。」

「じゃあ、聞いてた？私の話。」

「大まかにね。」

私は経験した内容を丁寧に音々へ話し終えた。音々は口から吐き出す煙で輪っかを作り出すと私を潤んだ瞳で見つめてにやけた。

「あんた、ヒロインかコカインでもやってんの？駄目だよ。手え出すんなら大麻まで。幻覚作用のある薬物には手出ししない事。法を破るなら自分の心身状態を正常に保つ程度まで。分かった？」

「音々、私の話真剣に聞いてた？」

「聞いてた。聞いてた。自分の寓話と名前が一致するレジスタンスの連中と会ったんだろ？夢が具体化してめでたいこった。さあ、打倒悪の帝王。」

「こら、やっぱり私の話、真に受けてないだろ！」

私は悪ふざけで音々をヘッドロックした。音々は足をばたつかせて叫んだ。

「Oh！レフリー！チョーク！チョーク！」

はしゃいで、戯れ合っている私と音々を、舞台上の役者達が演技の手を止めて呆然と見つめている。私はしとやかにしおらしく、乱れた服装を整えた。音々はカラカラと笑い声を立てた。

「どうしたの？みんな？稽古に集中、集中。舞台初日まで後間近だぞ。」

とりあえずは信奉されている舞台作家の言葉とあって役者達は再び演技に没頭し始めた。音々は煙管の火を消して懷に仕舞った。

「まっ、なんだ。私達クリエーターは何かと神経磨り減らす機会の多い人種。同業者にでも請け合ってみな。私も出来る範囲で手助け

してやつからさ。あんまり思い悩みなさんな。いざとなったら乃？の奴から伊瑠の養育費、もぎとりやいいんだから。」

「そりゃ暴論だ。私から断ったんだから。それに・・・同業者って誰？」

「いるでしょうが。気配りが利いてて思いやりの深い！情感あふれる優しい作家が。」

「誰？」

「あんだね。周りが見えないの？いるでしょうが。塔？。風氏塔？君。頼りがいがあるぞー。」

そう言って二人は顔を見合わせてため息混じりに声を合わせて笑った。

「そう。塔？君。」

実際、私には彼がどことなく頼りなく見えたのだ。まあ気休め程度にはなるかもしれない。彼、沈着で穏やか。教養も充分だからいかも。音々みたいなアングラ女と実りのない総合格闘技に励んでいる場合ではない。すると音々が私に振り返って尋ねた。

「何か言った。裸留枷。」

「凄い。あなたテレパシー能力でもあるの？」

「それがあるんだ。覚醒したのは七つの時の小学生の夏。蝉取りに出掛けた私は鬱蒼と生い茂る森の繁みの中で・・・。」

「じゃ、行くね、私。いろいろアリガト。」

「ここからがいい所なのに。クライマックス！クライマックス！」

「また機会があったらね。」

「そうかい。」

ふてくされる音々を残して、私は携帯でアポを取ると、塔？の執筆オフィスに向かった。突然の訪問だったのに、塔？は快く迎えてくれた。私がオフィスのインターホンを押すと毛並、色艶のいいシヤム猫を抱えた塔？が出迎える。

「あつ、いらつしゃい裸留枷さん。どうぞ上がってください。」

「品のいいシヤム猫ね。血統書付き？飼ってるの？」

「はい。この街の近くに引っ越して以来の付き合いです。店構えのいいペットショップで購入したんですよ。珍しかったなあ。この動物。」

「珍しい？猫が？」

私と塔？は他愛のない猫談義を交わしながら、彼のオフィスに向かった。塔？のオフィスには観葉植物が所狭しと置かれていた。それはさながら熱帯地方の密林のようだった。橙色の二十センチ程の花弁を持つ花の上では七色の原色を持つ物珍しいオウムがクチバシで翼をケアしていた。

「このオウムは飼ってるの？」

「いえ、このオウムはいつの間にやら紛れ込んだんです。自分の生まれ故郷とこの執筆オフィスの環境が似ているから馴染んだんでしょう。」

「このオウム、日本には生息してないよ。ペット業者が輸入して取り逃がしたのかな。」

「そうですね。外来種が土着すると生態系が壊れますからね。由々しき問題だ。」

私は振り返って塔？の顔を見た。自然保護に無関心なのか興味がないのか、漠然と感想を述べる彼は掴み所がなかった。塔？はにこやかな笑みを浮かべている。ハロルド眼鏡の奥には気負いのない知性が滲み出ていた。塔？は三毛猫を床に下ろすとキッチンへ向かった。

「何か飲みます？ダージリンティーなんて如何です？癖があつて美味しいですよ。」

「じゃ、よろしく。」

「猫のペットフード「ペディグリーチャム」なんておつまみにどうです？中々に口当たりが良くて美味しいですよ。」

私は苦笑いを浮かべた。

「結構！」

私はオフィスの中央の足下、硬質ガラスで隔てられた水槽を覗き

込んだ。熱帯魚が優雅に泳いでいる。熱帯魚は可憐で躍動的だった。するとティーセットとお茶菓子を持つて塔？が戻ってきた。

「中々、品のいいインテリア、室内装飾でしょう？その硬質ガラスの水槽も業者の方に無理にお願いして作ってもらったんです。」

「世話が大変でしょう？」

「いいえ。多少手間が掛かってもらってこれだけリラックス出来るならば苦痛じゃないですよ。」

「そうなんだ。」

私は塔？の運んできた盆を覗き込んだ。どうやら「ペディグリーチャム」はないらしい。ちょっと安心した。

「どうかしましたか？」

「いいえ何も。」

「じゃあ、あの籐椅子にでも座って話をしましょうか？急な用事なんでしょう？音々さんから電話が掛かってきましたから。「ノイローゼ気味だから構ってやれって。おかしくなったら近所のストレスケア医院にでも送ってやれ」って。」

私は拳を握り締めた。

「音々、あいつめ。」

私は憤懣やる方ない思いを押し殺しつつ、塔？と話し込んだ。私の身に起こった出来事、別世界と自分の寓話との類似、そして別世界の現実味について。私は一部始終を塔？に伝えた。塔？はしばらく考え込んで、閃いたように樂觀的な顔つきになった。

「一つの推理です。あくまでも。ひょっとしてそれはREM睡眠状態で見た夢じゃないですか。夢には覚醒時に機能していない脳の働きを活性化し、刺激し続ける作用があるんです。裸留枷さん、何か欲求不満があるとか、抑鬱状態にあるのではないですか？だから抑えられている脳の働きを回復させるためにそんな夢を見た。違いますか？」

私は案外、的を得た塔？の解釈に感心した。

「うん鋭い指摘ね。私、子育てと仕事に追われているから。現実逃

避をして心身双方の療養が必要だったのかも。」

「でしよう。」

「ただ何度も同じ種類の夢を見るなら問題ね。音々の忠告も意外に的外れではないのかも。」

塔？は間を置いて、もう一つの分析を提示してきた。

「別の解釈をすれば、・・・少しオカルティックです。パラレルワールドという考えをご存じですか？」

「うん、知ってる。現実と似ていながらも、少しずつ違いがある別世界。その一つに私が取り込まれたとでも？」

「参考の一つ。推理の助けにはなるでしょう。継続的にその現象が起こるのならば可能性の一つとして考えるのもいいですね。」

「非科学的な発想は余り好きじゃない。ただ現実には科学で説明出来ない不思議な現象があるのも事実。・・・塔？君。参考になったわ。」

「もういいんですか？裸留枷さん。僕でよければいつでも力になりますよ。」

私は籐椅子から立ち上がった。塔？も私を見送ってくれるようだ。私は最後、お茶請けに出されたお菓子を口に一つ放り込んだ。

「ところでこの緑色と赤茶色をしたおつまみは何？コリコリとした歯ごたえで美味しいけど。」

「ああ、それキャットフードです。」

おいコラ！私は後味の悪い食感に苛まれながら帰宅の途についた。すると私の紺色の軽自動車の前方に黒い車が車線変更してくる。交通マナー違反もはなはだしい。そう思うが早く、黒い車の後部座席のガラス窓が開くと、そこから二人の黒服の男が風に衣服をたなびかせながら、私のミニのボンネットに飛び移った。信じられんことをする奴だ。私は状況が把握出来ずに、ハンドルを切り、男達を振り落とそうとした。人間、パニックに陥ると妙に冷徹で非情になるものだ。私は激しく蛇行運転を繰り返した。すると男二人は吸盤状の金属手袋を窓ガラスに密着させると体を固定させる。おい、二人

とも、もう少し私の常識の許容範囲の行動をしてくれないかい？ 男達二人は頑強な面持ちで拳を私のミニのフロントガラスを殴りつけ始めた。ひび割れ、壊れていくガラス。イカン。これはイツカンの終わりだ。死ぬんならもう少しハートウォーミングな死に方をしたかった。こんな理不尽な結末なんて私は想像だになかったぞ。そんな気持ち心がをよぎった瞬間、あの偏頭痛、現実感の離れていく感覚が私に起こった。景色の動きが緩慢になり、実体が薄れていく。すると私の体と心は私にとっての現実から離れ、「時計塔に眠る怪人」。私の寓話の世界へと移されていった。遠のいていく私の意識は黒服の男達の胸元に小さく刺繍された文字を読み取った。そこには確かに「AM SOSI」と綴られていた。気がつくとは美術館天井部屋のアトリエのベッドに横たわっていた。かすかな眠気と気だるさが私の体を襲う。私は情報をまとめようとした。私がこの別世界を行き来出来るのは、百歩譲って納得できるとしよう。REM睡眠なり、精神障害なり、過労の蓄積なり。どうしても解釈出来る。ただ、何だ？ あの男達は？ 胸元の刺繍には明らかに「AM SOSI」の文字があつたぞ。二つの世界を行き来できるのは私だけではないのかい？ さらに彼らには「確実に！」私への殺意があつた。そんな過剰なバイオレンスの論法で物事を進めるのはやめにしないか？ イカン。考えがまとまらない。私はパニックで立ち眩みを起こしそうだった。取り敢えずはベッドから起きて、一杯煎れたコーヒーで一呼吸置くことにした。鏡に映る私の顔は、純粹無垢な少女の面影の残る顔立ちにまた戻っていた。一々意味を分析してたら、おかしくなりそうだ。私は画架の周りに置かれたテーブルにコーヒーを置いて、椅子に腰を下ろした。辺りを見回してもジファはいない。こんな時に限って、怪人と心通わせる少年がいないのだ。この一連の騒動、現象を分析出来る可能性が最も高いのはおそらくジファであるはずだ。彼ならAM SOSIの機密情報の内容を知っているだろうし、私が襲われた理由にも見当がつくだろう。

「おーい、ジファ。」

私が優しげに呼び掛けても返事なし。ジファ。なぜ今この窮地に、なぜ今このピンチにいない。私は神経質に、苛立つ心を鎮めながらコーヒーをたしなんだ。リラックスすると人間、脳の働きが良くなるのか、いいアイデアが浮かぶものだ。私はジファが私の首筋に貼ってくれた半透明のシールを思い出した。今現在もジファがシールを首に貼りつけていて、なおかつこの高度にハイテクノロジーな道具がお利口に機能するなら、ジファの居場所を私に脳内伝達してくれるはずだ。そう閃くと私はコーヒーに一口、口をつけて瞳を閉じて心を穏やかにした。私が軽い瞑想状態に入るとぼんやりと映像が頭に浮かんだ。

冷血 2

どこか仄暗い室内が見える。その部屋の壁の四方には、据えつけられた発光ダイオードが紺碧に点灯している。そしてU字型のデスクに男が座っている。その男は、楕円形の直系五メートルはあるだろう湖面を隔ててジファと向かい合っているようだ。水面には天井から規則的に水滴が零れ落ち、同心円上に波紋を広げていく。紺碧の灯が湖面を群青色に染めていた。ジファとその男は旧知の間柄らしい。互いに胸を開いて話をしているようだ。ジファが若干鋭い口調で男を問い質した。

「ドージ・カルメロ。あなたの政府上層部への密告がなければ、カルツアはもちろん、俺の父も・・・（ノイズ音で聞こえない）。汎用科学技術協会の計画は頓挫、もしくは中長期的に停滞したはずだった。あなたは傲慢で、なおかつ権力迎合的な追従者だ。宰相ノルガバにおもねるのを拒否しなかった。科学的知性を除けば、あなたは殺戮の道具を作る機械的技術者だ。人間性に欠けている。あなたは報いを受けなければならない。」

ドージ・カルメロと呼ばれた男。薄明かりで、ぼんやりとしか顔が見えない。白髪の間髪を混じるあご鬚と、まだ壮年の意気盛んな研究者としての顔が不調和を見せていた。

「ジファ。ロウの背任、カルツアとの共謀は技術協会への背反に他ならなかった。技術協会と言えども自由な機関、組織ではない。政府の、そして宰相ノルガバの直属、統括下にあるのだ。彼の政治的意志にそむく人間ならば、排斥されても仕方がない。君の父親ロウとカルツアの・・・（またノイズだ）避けられなかった。」

ジファはドージ・カルメロを問い詰める。その口振りは凄絶で攻撃性に満ちている。怒りさえ滲ませているようだ。

「あなたは汎用科学技術協会の一員としてではなく、一人の人間として良識的な判断を下すべきだった。ましてや正常な見識を働かせ

た同僚を権力に引き渡すなどやるべきではなかった。」

ドージ・カルメロはジファの批難にも動じる気配はない。自らの哲学と政治信条、科学観を口にした。

「AIの研究は軍事利用が出来るか、出来ないかの分水嶺にまで来ていた。そこにモラルや倫理、自己規制などの夾雑物が入り込む余地などない。科学は発展するべくして発展し、進歩するべくして進歩するのだ。初めは拒絶感があるう。だが民衆はやがて馴れ親しみ、常識として受け入れる。科学の探訪とはそういうものだ。君の父親とカルツアは夾雑物そのものだったんだよ。抹消すべきだった。それが我々の職務でもあったのだ。」

ジファの声に、より鋭さが増す。彼は激情を押し殺し、冷徹に彼を責め立てる。

「あなたは国家の軍略に組み込まれたテクノロジーに疑問の一つさえ抱かなかったのか？真理の探究、科学の人類への貢献、テクノロジーの世界的普及なんて俺も奇麗事は言わない。ただ一学識者としての思考はもつと柔軟で良かっただろう。取るべき手段は多岐に渡っていた。権威への同調だけが選択肢ではなかったはずだ。」

ドージ・カルメロは冷淡だった。彼は国情と世界情勢を克明に分析していた。

「ジファ。理想論は必要ない。我々は戦争をしているのだ。しかも苛烈で過酷な。国際法の庇護などまるでない陰惨な戦争だ。あらゆる手段を講じなければ我々は、君も！私もだ！殺されるんだよ。そこには融和思想も人類としての連帯感などもまるでない。そこには生存競争に邁進する人間の衝動が存在するだけだ。我々は進化の過程で淘汰される人種になつてはならないんだよ。勝利は必須なのだ。そのためにはあらゆる手立てを尽くすべきだ。そうだろう？ジファ。」

ジファの口調にかすかな穏やかさが宿った。彼は大きく息を吐き出す。

「あなたの見解は存分にわかった。それでは俺が裁定を下す番だ。」

俺自身が律法となり、規律となり、不文律となり、一人一人裁いていくだろう。俺の価値指標に背く人間、逸脱者は皆、押し並べて粛清される。俺は執行人だ。審判はそうなるべくして下されるだろう。暗澹と、嘆きの岸辺に立つ俺自身の手によって。」

一瞬の静寂。湖面を雫が静かに、周期的に弾いている。ドージ・カルメロは最後に尋ねた。

「一つ聞こう。君の復讐劇が始まったとして、なぜまず最初に私を狙う？なぜ一介の科学者に過ぎない人間を標的に選んだ？社会的衝撃、政府への打撃を考えるならば、政府高官、軍幹部、技術協会会長ノマ・ゲルマノなど幾らでもいただろう。」

ジファは丁寧な答えていく。彼の心は静けさに満ちているようだった。

「俺の報復。体制、軍産複合体への反逆はヒエラルキーの頂点を徐々に目指していく。そのプレリユードがドージ・カルメロ。あなただったというだけだ。」

「私は下層域に生息する貧民というわけか。それもいいだろう。君の歌劇を開演するといい。」

ジファは銃口をドージ・カルメロに向けた。ジファは何かの著作の一節を暗唱する。

「罪深き者と清廉なる者を分ける境界が崩れし時、かの人はある者には光を照らし、ある者には闇をもたらすだろう。かの人の意志において、かつて私自身が復讐すると宣言したかの人の名において鉄槌は振り下ろされる。濃紺の空に裁きの声は響き渡り。我はただ祈り、永久の安息を願うのみである。ここに切なる願いを込めて、祈りを捧げん。」

引き金が引かれ、銃声が響き渡ると同時に映像は途絶えた。私は瞑想状態から覚めると状況を整理した。ジファは復讐のため？人を殺している？ジファは復讐心？何か妄信にとらわれていて、殺人に手を染めている？彼はヒエラルキーの頂点を目指すと言った。ならば彼は殺人を繰り返すつもりなのだろうか。私は瞬時に思った。彼

を止めなければ。例えどんな怒りと苦悩の理由があつたとしても。

私は考えるよりも早く、本能的に、駆り立てられるように美術館のアトリエを飛び出していた。私は回廊を走り抜け、螺旋階段を降りていくと酒場のバーカウンターに掛け合った。私が激しく取り乱していたので、高潔さを装う店員は取り澄ました顔を崩さずに、怪訝そうにしているだけだった。私は面識の一切ないその店員にひたすら訴えた。私は困惑していて口にする言葉は乱れていた。

「ローズ！ローズ・ジニー！彼女に、彼女に、私が！私に彼女を会わせて！酒場の一角に拠点、彼女は本拠を置いてる。そうでしょう！？」

店員は口止めをされているのか、真剣に私の要求を取り合ってくれなかった。するとカウンターの奥から身軽なファッションを身に纏った三十代前半程の男が現れた。赤と黒を基調にしたジャケットが鮮やかな男性だった。少し不精でフランクな印象、右目は見開いているものの、左目は不均衡に半覚醒状態にあり、気さくな顔立ちが親しみが持てた。私は動揺しながらも妙に冷静だった。私は彼を目にとめるなり、こう言った。

「あなたの名前はカザ・ノルティ。ローズ・ジニーとジファの級友。ジファとローズ・ジニーの仲に嫉妬して司祭ストルツアにジファを引き渡した男。趣味は天体観測と、惑星運行の計算。」

男は戸惑って、眉間に皺を寄せると返答した。

「お、おお。大部分は不正解だが、名前は合ってる。良く分かったな。お嬢さん。」

私は嬉々として彼を指差した。

「でしょう！？あなたは優しくて義理深い性格なんだから嫉妬しちゃ駄目よ。嫉妬は人間の心に破滅をもたらす毒の密。気をつけて。」

カザは私に気押されていた。

「わ、分かった。」

彼の柔軟な態度を見て、私は我に返った。こんな話をしている場

合ではない。

「カザさん。ローズは！？ローズ・ジニーはどこ？彼女に会わせて！」

カザは冷静だった。私の話を慎重に検討していった。

「ジファが殺人に手を染めた？彼には彼のプランがあるだろう。この動乱下にある国情では対立する陣営の死傷者、犠牲者は避けられない。彼は彼の計画を軌道に乗せた。それだけのことだ。」

私はカザの瞳をひたむきに見つめた。

「ローズに。ローズ・ジニーに私を会わせて。」

私の切実な思いが彼に通じたのか、カザは沈黙し、了解してくれた。

「裸留枷。優那裸留枷だったな。君を信賴して、彼女の「オフィス」に案内しよう。ただし、口外は無用だ。」

「もちろん。」

私とカザはバーカウンターの扉の向こう、楔字型の通路を幾度か右折、左折を繰り返し、ローズ・ジニーの「オフィス」に辿り着いた。・・・はずだが扉がない。白い壁に紫の染みが数ヶ所、目につくだけだった。カザが薄く黒い掌大の感光板を紫の染みにあてるとセンサーが反応して「オフィス」への扉、壁にしか見えなかった場所が両開きの扉として開いた。感光板の電磁気信号がカザを判別したのだろう。「オフィス」は足の踏み場もないほど、導線やコンピュータの配線、そしてコードが入り組んでいた。室内中にメカニカルな電子機器と回路があり、壁に敷き詰められた機械基盤が私を圧倒した。薄暗い電灯で照らされ、ディスプレイが幾つも配置されている。そしてディスプレイの一つが置かれたデスクの前、簡素なデザインの椅子にローズ・ジニーは座っていた。彼女は振り返るとカザに尋ねた。彼女は眼鏡を掛けていた。

「何？どうしたの？カザ。そんなに慌てて。」

彼女、ローズ・ジニーは膨大な事務処理と情報整理を行っていた。彼女は理知的な顔をしている。そしてどこか冷たい印象もぬぐえな

かった。カザは事情を彼女に話した。彼女は軽く頷くと私に優しく話し掛けた。まるでごねる娘をなだめる母親のようだった。

「裸留枷。私達は互いのテリトリーに踏み込まない条件で交流している。あなた達に滞在先を確保したのも過干渉を避けられる前提があつたから。彼は私達への協力を拒んだし、私達も彼への過度の要求を控えた。双方が分かち合つたのは機密情報と滞在先。何の過不足もない。理解出来た？」

私は真つ向から彼女に反論した。

「手段やプロセス、動機が違つても標的は同じだと言つたのはローズ・ジニー。あなたでしよう？一度は協力を求めた人間、同胞の一人だと解釈しても矛盾はないはず。彼の危機を救つても矛盾しない。私の主張は決して子供染みてはいないはずよ。」

ローズ・ジニーは誠実に私の意見に耳を傾けていた。ただ彼女の返答は私の期待を裏切るものだった。

「裸留枷、あなたは直情的に考え過ぎてる。確かに私達とジファは目的を共有するのも可能。ただ誤解しないで。私達とジファは協力関係にない。双方の方法論に不可侵だからこそ、互いに警戒心を抱かないし、緊張感もない。筋道立つた論理だと思うけど。どう？納得出来た？」

私は彼女を軽蔑的にとがめた。

「ローズ・ジニー、あなたはリスクとメリットを数値的に考えるのね。時に理不尽で不合理な感情が入り込む余地を自分自身に与えてもいいんじゃない？この「オフィス」のようにあなたの思考は機械的よ。」

彼女は即座に反論した。

「機械や数値を蔑視するのは間違い。感情や心の選択基準も人間の経験的な知識、データで構築されている。私は無機的で感情のない人間ではない。何よりも私は組織の利益を優先する模範でなければならぬ。私的な問題であればあるほど、繊細に自己分析をしなければならぬのよ。・・・理解して。」

私は覚悟を決めた。ローズ・ジニーとは別れる。私一人でもジファを助けに行く。彼を死の危険から遠ざけたいし、彼がカルマを重ねるのも止めたい。私は彼女を責めた。

「組織ね。あなた達、反戦組織でしょ？一人の人間が人を殺し、殺される可能性を秘めているのに、それを見過ごして何が反戦？自己倒錯にも程がある。幻滅してあきらめるわ。あなたは自己弁明しているだけ。独善的なのは、戦争を遂行している国家でも、独立的なジファでもない。独善に溺れてるのはローズ・ジニー、あなたの方よ。」

ローズ・ジニーは穏やかな瞳で私を見つめていた。私は踵を返して駆け出した。「オフィス」を出ようとする私の腕を力ザが引き留めた。

「どこへ行く！？裸留枷！」

「決まってる。私だけでジファを救い出す。彼の苦しみから、彼が胸に秘めた憎悪から。」

力ザは説得する。

「感情に流されるな。裸留枷。武器も持っていない、ジファの所在地も分からない。君一人で何が出来るっていうんだ。」

私は力ザの手を振りほどいた。

「離してよ！」

すると沈黙していたローズ・ジニーが私に呼び掛けた。

「いいわ。裸留枷、いらっしやい。あなたの衝動を尊重するわ。来なさい。」

「ローズ・・・。」

彼女は手早くコンピューターを駆使してデータ検索を始めた。私は誘われるように彼女のそばに歩み寄った。モニターには国家機関の施設の数々。そしてその構造が大きく表示された。

「あなたの情報は断片的ね。手掛りは？」

「ジファは相手の名をドージ・カルメロと呼んでいた。」

「それで充分。ドージ・カルメロは汎用科学技術協会の理論的スポ

「クスマン。恐らく場所は技術協会の施設内ね。他には？」

ローズ・ジニーはプログラムをチェックし、技術協会の設計図をモニターに映し出した。

「楕円の湖が部屋の中央に。曲線の電灯？それが壁に据えつけられていた。後、観葉植物が室内装飾になっていたような・・・。」

ローズ・ジニーは事実の切れ端をヒントに、あてはまる部屋を探した。すると私の記憶に鮮明に残る室内の間取りが拡大して映し出された。

「ここ！ここだ！」

私は叫んだ。ローズ・ジニーは落ち着いて、解き明かす。

「ドージ・カルメロの第三執務室ね。リラクゼーションと黙想を兼ねたメデイテーション・ルーム。観葉植物は彼のエコロジストとしての一面を表している。」

カザがローズに尋ねる。

「侵入経路は？」

「ジファは空路を辿ったはず。第三執務室までのプロテクト・遮断扉は十二。それぞれ10の30万乗程度のセキュリティ・コードが記録され、一日ごとに更新されている。ジファが持つアルゴリズムを利用すれば解析出来る。完全な乱数ではない。周期的に相似値を幾度か示したはずだから。」

ローズ・ジニーはせわしげに立ち上がると武器収納庫を開き、兵器を装備、装填した。私にはレーザー・ガンを手渡す。戸惑う私に彼女は事も無げに言った。

「あなた、彼の事好きなんでしょ？」

私は自分の頬が火照るのを感じて慌てて取り繕った。

「えっいや。そんなんじゃない・・・。えっと確かに嫌いではないけど・・・。」

ローズ・ジニーは瞳に微笑を浮かべた。

「行くわよ。裸留枷。彼の援護射撃に。」

「はい！」

私は力強く頷いた。私とローズ・ジニー、カザの三人は「オフィス」から出て、空へと？がる格納庫へと向かった。

冷血 3

そこには幾つものマシンが待機していた。

「凄い。」

私は感嘆の溜め息を漏らした。ローズ・ジニーは言う。

「今回は少数進撃だから柔軟可変駆動機、略称「FVM」を使う。
ついて来て。」

私は鈍い銀色の光を放つボディ、「FVM」を恍惚として見つめた。ローズ・ジニーは手短に機能の説明をしてくれた。彼女の頭脳は明晰だった。

「見た印象は陸路専用を彷彿とさせる。実際は水路、空路いずれも推進可能にする変形型のマシン。「柔軟」で「可变的」と呼ばれる由縁ね。胴体は直立型二足歩行のマシンにも変型する。装備は迎撃・追撃弾道弾、光高密度エネルギー、電磁波燃烧装置、光波ソード、誘導砲弾、光学シールド。以上よ。搭載されたAI機能が操縦技術を補佐してくれる。不可視領域の攻撃も回避出来るわ。AIが導入されている分、ジファは「FVM」を毛嫌いしてたけどね。」

んぬぬ、なにやら難しいが、性能もなんとかわかった。心の準備も整ったことだし。それにしても「FVM」の能力を力説するローズ・ジニーの目はちよつと怖かった。私とローズ・ジニー、カザは「FVM」に乗り込んだ。格納庫の扉が開いて、「FVM」は空へと飛びたった。瞬く間に遠ざかる琥珀の広場の全景。「FVM」のサーチシステムが汎用技術協会の位置を特定し、AIが安全経路を確保した。ローズ・ジニーは空路を経て都市部に侵入した後、技術協会へと向かうつもりらしい。夜闇を滑空する「FVM」から眺める夜景は壮観だった。私はふと小さく息を漏らした。「FVM」はネオンの華々しい都市中枢、高層ビル群の狭間へと進み、加速していく。エアカーの行き交う交通路は混雑していて、ニアミスが頻発している。自動操縦機能で衝突事故を防いでいるのだろうか。にし

てもローズ・ジニーの操縦はやけに荒い。私は試しに聞いてみた。

「ローズ・ジニー。運転はマニュアル？オート？」

ローズ・ジニーは昂揚している。

「オート？マニュアル？随分古い表現ね。人間の神経系統とAIが連動して安全運転を！ディレクトしてくれるのよ！任せておいて！」

・・・ローズ・ジニーの目は怖かった。彼女はハンドルを握ると人格が変わるタイプらしい。彼女も「可変的」なのか。ナビシステムが技術協会のある区域へと「FVM」を誘導する。遠くに見える技術協会敷地内ではなにやら騒ぎが起きている。噴き上がる爆炎。ジファと護衛システムが争っているのだろうか。ローズ・ジニーが「FVM」の指示系統を調整すると、「FVM」は噴煙の立ち上る場所へと進む。瞬間！機体が激しい反動を受けた。ローズ・ジニーが叫ぶ。彼女の目つきは異様に鋭い。

「技術協会区画内の防護電磁場ね。テクノロジーの進歩は体制側だけじゃないのよ。あなどらないで。」

「FVM」の侵入を阻む防護電磁場。ローズ・ジニーは素早く「FVM」を人型二足歩行のボディに変形した。立て続けに光波ソードを「FVM」に装備させて、防護電磁場を切り裂く。ほとばしる閃光。ローズ・ジニーは叫ぶ。

「カザ！機体主要部の均衡維持、衝撃緩和を！」

カザは速やかに機器の点検を行い、ローズ・ジニーの要求に応じたようだ。私は汗の滲む手でレーザー・ガンを握り締めたままひたすらジファを探した。すると技術協会を守る駆動機が放つ光熱波で芝生が燃えあがった。そこに高く飛びあがる人影が見えた。私はとっさに叫んでいた。

「ジファだ！」

同時に「FVM」の光波ソードが防護電磁場を切り裂き、凄まじい波動音を響かせて機体を敷地内に入らせた。ジファは駆動機の一台上に飛び乗り、装甲板をはぎ取ると破壊している。爆発する駆動機。ジファの超人的な力に私は震えた。私は彼の動きを目で追う。飛び

退くジファを護衛システムの光熱波が追尾していく。ジファは私達「FVM」を目にとめたようだ。光熱波を交わしていくジファ。光熱波はターゲットを見失い、防壁に衝突すると光、熱エネルギーを鮮やかに放って消えた。ローズ・ジニーの指先が射出機のトリガーを巧みに操る。「FVM」は駆動機目掛けて追撃弾道弾を発射した。身を軽やかにしりぞけるジファが私の目に映った。彼の姿は月明かりにシルエットを映す軽業師のように美しく華麗だった。追撃弾道弾は駆動機を的確に仕留めて、次々と破壊させていく。駆動機と防護システムは標的をジファから「FVM」に変えたようだ。けたたましいサイレンも鳴り響く。出撃してきた機動隊と警護駆動機が連隊を組む。彼らはターゲットを「FVM」に絞ると、光熱波、ミサイル、砲弾で波状攻撃してきた。AI機能が自動回避システムで「FVM」を安全な場所へと移動させて行く。ローズ・ジニーは素早い動きで操縦席の電動レバーを回して、光・熱エネルギーを充填開始した。カザもAI機能と連携するため、計測機器類の確認、操作に必死だ。連隊の一斉砲撃が一瞬止まった隙に、人口音声が「FVM」のコックピット内に響く。光・熱エネルギーの充填が完了したようだ。ローズ・ジニーはわずかの迷いもなく放射トリガーを引いた。眩いほどの輝きを放ち、光高密度エネルギーは放射された。夜闇を光が満たして、周囲を照らした。破滅的に溢れる光高密度エネルギーは警護駆動機を飲み込み、溶かしていった。機動隊はおびえて、散り散りに逃げていく。私はそのカラストロフィーに圧倒され目を見開いていた。やがて光は収まり、駆動機の残骸だけが残った。「FVM」は技術協会内に着地し、ジファを迎え入れる態勢を整えた。コックピットの扉が開き、私は焼け焦げた芝生に足を降ろした。ローズ・ジニーとカザは緊張から開放され、乱れた呼吸を整えている。私は、よろめき、歩いてくるジファに呼び掛けた。

「ジファ！」

その時破壊されたはずの警護駆動機のコックピットが開いた。そこから顔をのぞかせる操縦士がレイ・ガンをジファに向けて構えて

いるのが私には見えた。私はとっさの判断でレーザー・ガンの引き金を引いた。ジファの叫ぶ声が私の耳に響いた。

「撃つな！」

私の放った光波は操縦士の体を通き、彼は力無く倒れ込んだ。私の指は、体は、硬直し、震えていた。ジファが私にゆっくりと歩み寄り、私の両手を握り締め、私が構えたレーザー・ガンを降ろしてくれた。彼の声は悲しみに満ちていた。

「どうして来たんだ。裸留枷……。」

私は目眩にも似た感覚を覚えて、ジファの胸に倒れ込んだ。彼の白いシャツには赤い血が染みついていた。……夢の中。流れる砂がなだらかな砂丘を形作り、砂の波がゆるやかな起伏の砂漠を流れていく。空は青く澄み渡り、雲一つなく、乾いた冷たい風が吹き抜けていく。私はシルクで織られた衣服を身に纏い、凍える冷気を感じながら歩いていく。あてもなく流浪した先、所々磨耗した大理石の円卓が砂の中に埋もれているのを私は見つけた。卓上に浮かぶホログラムのモニターにはおびただしい量の遺伝情報と塩基配列が記されている。アデニン、チミン、グアニン、シトシンの並びが絶えず変えられていく。乱数で制御されているのか。カオティックに配置されていくようだった。これは意味を持つ塩基の配列ではない、ただのA・T・C・G、アルファベットの無秩序な並びだ。私がそう感じた瞬間、上半身裸の少年が私へ背中越しに話し掛けてきた。彼の体には白い絵の具が乱雑に塗られている。彼は言う。

「遺伝子間領域。『ジャンクDNA』と呼ばれる。遺伝情報をほとんど持たないと断定された二十二億の塩基。ただ彼は気付いた。生体構成に影響しないはずの寄生DNAにこそ、人間を突然変異的に進化させる鍵が隠されているのを。」

少年の顔には見覚えがある。いやむしろ私がかつて作り上げたと言っべきだろうか。性超越的な透明感のある横顔。赤とエメラルドグリーンの瞳。私は少年に聞いた。

「君、名前は？」

少年の澄んだ鋭い瞳がひときわ輝いた。風が彼の髪をなびかせていく。

「俺の名は・・・ジファ。彼は・・・「怪人」オルザヴア。」

その途端、風が吹き抜け、砂塵が舞い上がり、視界がさえぎられた。そして私は夢から覚めた。・・・身体中に脱力感を感じる。頭が重く、こめかみを締め付けるような痛みがあった。場所は・・・、美術館のアトリエだ。二つの別室に仕切られた寝室の内一つに、私はいた。薄い扉一枚でさえぎられたアトリエから軽い言い争いをする声が聞こえる。口振りは抑え目で、物静かで穏やか。激情とはほど遠い印象。ただ声からは怒りを強く感じているのがわかる。声の主は・・・ジファだ。

「二つに分かれて政府中枢を打倒するはずだった。お互いに。」

もう一人の声はローズ・ジニーだ。

「救援が必要なかったとでも？そう、私自身、あなたとの暗黙のルールを守るうとした。ただ裸留枷、彼女は素晴らしい考えの持ち主。彼女の差し迫った想いを無視出来なかった。女性的な感情だと蔑むなら蔑んでもいい。・・・ただ、あなたは自分の能力を乱用し過ぎだ。体に変化が来ているのも分かるでしょう。あの時、私達が援護しなければあなたは危険な・・・。」

ジファが言葉をさえぎる。

「俺の肉体的、精神的変化など心配しなくていい。俺は目的を達成した後、破綻するならそれでいいと思っている。気づかいはいらない。大切なのは、野兵戦の経験が一切ない一般女性を連れてきたことだ。しかも無思慮に武器まで持たせて。軽率に過ぎる。彼女は・・・心に深い痛手を負ったはずだ。」

ローズ・ジニーは自分の考えを言う。

「戦闘経験があろうとなかろうと防衛手段として装備は不可欠よ。あなたは少数が多数を撃退するゲリラ的戦術に通じていない。その分、私達の考えを理解出来ていない。彼女を無防備にするわけにはいかなかった。それに・・・彼女は待機命令を出しても、かたくな

に拒否したでしょうね。無理強いにでも「FVM」に同乗したはず。彼女、あなたを・・・強く思っているのよ。」

ジファの激情が吐き出された。

「そのために！あの娘は！」

私は朦朧とした意識で、乱れた髪、服装のまま、寝室からアトリ工に出た。ジファとローズ・ジニーは口論を中断し、静かに私を出迎えてくれた。私は何か重要な事件を起こしたのをぼんやりと覚えていた。でも具体的ではなかった。私は沈黙を通す二人にかける言葉が見つからなくて、ぎこちない挨拶をした。

「おはよう。ローズ・ジニー。ジファ。今朝の朝食はトーストとパスタ、コールスローに紅茶にしようと思ってる。二人とも朝食は済んだ？まだなら私が用意するわよ。」

ローズ・ジニーが優しい瞳で私に話し掛けた。

「私達は平気よ。長期戦線に耐えるため、絶食訓練も受けてるから、多少の空腹は気にならない。それより裸留枷。あなたの調子はどう？気分は？」

私は記憶の名残をたどり、この疲れ、不安定な感情の原因を探した。その瞬間、私にとって余りに痛切な思い出が蘇った。放射されるレーザー・ガン。撃ち抜かれ絶命する操縦士。徐々に私は震えが止まらなくなり、軽いパニックに襲われた。

「私・・・私・・・人を、殺した。殺してしまった。ジファを助け出すなんて意気込んで。この世界のことを理解すらしないで、正義を気取って・・・。」

ジファは私に近づくのとそっと私の頭を抱き寄せてくれた。

「裸留枷。大丈夫。全部、君の作り出した物語、「時計塔に眠る怪人」の中での出来事だよ。君にとっての現実じゃない。全部作り話だ。だから・・・大丈夫。」

私はジファの優しい呼び掛けに涙がひとしずく、零れ落ちるのを感じた。ローズ・ジニーはただ口元に手をあてがい沈思していた。とても静かで穏やかな時間が過ぎていくようだった。私の涙はしば

らくやむことはなかった。少しの静寂の後、アトリエへ扉越しに力ザの呼び掛ける声が響いた。

「ローズ・ジニー。緊急情報伝達だ。すぐに来てくれ。」

ローズ・ジニーは気まずそうに服装を整え、小さく深呼吸をすると、私とジファに一度視線を送り、品よく会釈してアトリエを出た。「失礼。」

アトリエの壁面にはホログラムモニターが映され、ニュース映像がネット配信されていた。昨晚の事件を伝える報道に私は自然と引き込まれていた。

「昨日深夜未明、汎用科学技術協会にA急不穏分子「A・130F」が不法に侵入。技術協会のスポークスマンでもあり、人工知能開発の主要研究者の一人、ドクター・ドージ・カルメロを射殺した模様なおかつ、技術協会の警護システムを破壊し、「A・130F」の逃走を手助けた反体制組織の駆動機は、人工衛星上からの所在特定を遮蔽膜で防護。政府の追跡を免れました。今回の謀殺事件についてアノマ・カロメ第二執政官は会見に応じ、声明を発表、反政府組織の一掃を宣言しました。」

アノマ・カロメと呼ばれた女性。モニターに映る女性はまだ三代で黒いスーツとパンツを着こなし颯爽としていて気品に溢れていた。彼女は清廉とした印象の女性だった。ジファが呟く。

「第二執政官、つまりは宰相ノルガバに次ぐ政府のナンバー2だ。外交的には穏健。強硬な戦争推進派ではない一方、内政面、特に反体制組織、反体制活動家に対しては強硬だ。それは彼女の幼児期の惨劇に理由がある。」

「幼児期の惨劇？」

ジファは押し黙り、反体制組織掃討を宣言する第二執政官アノマ・カロメのスピーチに聞き入っていた。肩口で切り揃えられたアノマ・カロメのストレートの黒髪は光輝で潤い、可憐だった。瞳は幻惑的で、神秘掛かった求心力を持っている。彼女の芯が強く、透き通った声に私は魅了された。

「戦時下に体制転覆を画策し、混沌と無秩序を蔓延させ、市民の安全を脅威に晒す反戦活動家は、民衆、並びに公共の敵であり、自己矛盾を抱えた暴徒である。私は彼ら組織の末端まで解体、壊滅させるのに僅かばかりの躊躇もない。彼らの活動がどんな理想で粉飾されていようと、私は彼らの奸計、奸智に屈伏するつもりはない。徹底的に打撃を与え、彼らを拘禁し、断罪する。彼らに弁明、弁解の余地はない。私は、これより宰相ノルガバの許可を受け「反戦活動組織掃討計画」を発動させる。彼らの潜伏地、拠点、本拠は速やかに一掃されるだろう。これは市民の静穏で安全な生活を保障するものである。私は国民の理解を求めると共に国民の不安を解消すると約束する。長引く戦局は国益を拡張し、終息すると確約して私の会見を終了させてもらう。」

映像は切り替わり、質疑に応じる老政治家を映し出した。落ち着いた口調で原稿を読み上げるキャスターの声が響く。

「なお、ギラルド国務大臣はキナ湾岸戦線での空域、陸域双方での良好な戦果を報告。「湾岸作戦」における……。」

ジファはニュースに関心を失ったように呟いた。

「琥珀の広場。時計塔の地下街も、もう安全ではないかもしれない。ここもやがて危険にさらされる。あるいは……琥珀の広場の活動家を監視下において放置。反政府組織のネットワークをつかんだ後、一網打尽にするか。いずれにせよ。事態は変わった。俺は俺で目的を達成しなければならぬ。限られた時間内で……。」

私はたくさんの情報と記憶の中からジファに伝えるべき事実を探していた。確か……、そうだ！

「ジファ。奇妙で信じにくい話だけど。この世界についての別世界、私にとっての現実で、存在するはずのないAMSSOSIが私を襲った。ジファの現実と私の現実とは隔たれながらも？がつている。私も良く理解出来てない。でも……！」

AMSSOSIの名前を聞いてジファの顔色が変わった。私という不可思議な存在について、私の寓話と彼の現実との奇妙な一致につ

いて、ジファは思い当たる節があるようだった。彼は流れるような植物装飾の椅子に私を座らせると、私の瞳を見つめた。

「詳しく・・・、話を聞こうか。」

雪降る夜 1 アノマ・カロメ

10月7日。その夜は肌寒く、季節外れの雪が降っていた。その日は電灯が全世帯に普及したのを記念する祝祭日で、子供達にとつては祭が行われる心楽しい一日だった。各家屋は室内の灯を消して闇の精霊に扮装した子供達が来るのを待つ。闇の精霊に灯を燈すよう警告された大人達は全部屋の電気を点灯させ、暗闇から救済してくれた闇の精霊へのお礼にチョコチップクッキーをあげる。子供達は儀礼の意味合いにはさして関心がなく、お目当てはプレゼントされるクッキーだった。私と級友達は二十を超える家庭で闇の精霊としての名演をこなし、胸一杯のクッキーにあずかっていた。当時12才だった私は両手から零れ落ちんばかりのクッキーを胸に、祭のゴール、私の自宅へと急いでいた。国防省長官を務めていた父は厳格な印象が強く、その父が笑顔で子供達と祭事でコミュニケーションしてくれるのは、私にとっても特別な出来事だったのだ。黒と白でペイントした自分の顔がとても愛おしく感じたのを覚えている。吐く息は白く、指はかじかんでいた。住宅街から一区画離れた、人通りの少ない場所に父の邸宅はあり、その姿を坂道の高台から見ることが出来た。自宅の灯は消えている。仕事人間で頑なな雰囲気のある父が子供達と一緒に遊んでくれるのが何よりも私には嬉しかった。高台に待ちかまえる級友達は身震いし、中には萎縮する子もいた。父のパブリックイメージは軍備拡張を推し進める好戦的閣僚で、簡単に言えば子供達の言葉が通じない強面の大臣様だったのだ。私は、じゃれて、ふざけ合い、緊張を解きほぐす級友達をよそに自宅を見下ろした。静かな印象の家屋は、悪戯好きで、時に人を脅かす闇の精霊の到来を今や遅しと待ちかまえていた。私は父との数少ないコミュニケーションの機会に胸を踊らせた。私には父との遊びこそ最大の報酬だったのだ。ふくらむ期待を温め、いよいよ覚悟を決めたその時、自宅の窓ガラスから異変が確

認出来た。ほとばしり、明滅する光、しばらくの間隔を置いて再度瞬く光。級友達是不穏な予感を感じて押し黙った。祝祭の高揚感はいずれから消えていた。胸騒ぎがした私は急いで坂道を駆け下り、自宅の扉を開いた。鍵は開いていた。電気は全て消えていて朧げにしか室内の様子は確認出来ない。私は震える足取りで父と母の待つリビングへと向かった。足元に液体のぬめりを感じる。私は恐怖と動揺がない交ぜになり、こわばった指先でリビングの灯を点けた。そこはフロア一面に溢れんばかりの血が流れており、ソファに座る父と母が無残に銃殺されていた。必要以上の銃弾を体中に撃ち込まれてその光景は私の目に今でも生々しく焼きついている。のちに、葬儀の席で国防省の官吏から、父が軍拡に反対する反政府組織から標的にされていたのを知らされた。軍縮を声高に主張しながら、暗殺に手を染める。その日から、矛盾した論理を持つ反政府分子は私にとって復讐と怒りの対象となった。あれから22年経つ。10月7日、嫌な日だ。折りしも両親が反政府組織に謀殺された命日に、反政府組織の掃討計画を娘である私の自身が宣言しなければならないとは皮肉な巡り合わせだ。物思い……。回想から現実に戻った私の耳には、執務室で午後のスケジュールを告げる秘書の声が届いていた。

「2：30海軍航空母艦の開発プロジェクト機構の技術者、設計者による航空母艦の開発状況及び戦略的意義の説明会。6：30反戦組織掃討計画遂行チーム幹部との食事会。8：30反戦組織掃討計画第七課の夜間訓練の視察。11：00遺伝子解析機構・枢要機密保管庫にてノルガバ宰相との会談です。」

「ご苦労。」

私は無感情に秘書をねぎらった。山積みの軍務は私に気力を与えてくれる。現在、内政的にも外交的にも政権は安泰ではない。だが存分に対処は出来る。戦争は国論を二分しているが、民主的に選ばれた宰相が宣戦布告し、開戦したからには、勝利へと祖国を導くのが、私達政治家の役目だ。きっかけや大義について検証する余裕な

どありはしない。それが私の愛国的姿勢でもある。国家の保護下にありながら政策に反抗かしない、怠惰で無気力な連中との妥協など一切しない。私は彼らを一掃するだろう。彼ら自身を自己倒錯から開放してやるためにも。私は執務室を後にし、「枢要協議議事堂」から出ると黒塗りの車に乗り込んだ。護衛管、運転手の動きや振る舞いは形式的だった。それが効率を重視する私には不快でならなかった。伝統を敬うだけの虚飾など必要ないはずだ。私は少しけわしい顔つきで、小型モニターに記録された空母船設計図を見た。車はやがて空路を経て、海軍軍事施設「F・2075D」に着いた。セキユリティチェックは政府要人として例外ではない。ゲノム解析機で塩基配列を瞬時に読み取った後、人物を特定する。私はこの洗練されたテクノロジが好きだ。科学に停滞は許されない。それが私の考えだからだ。私はセキユリティチェックをすませると、海軍施設管理者ナノ・メタムに会議室へと案内された。関係者はすでに集まっていた、私を待ちわびていた。私は浮遊型の椅子に腰をおろすと新空母の性能と戦略的意義について、技術者と軍幹部の話を聞いた。彼らの説明が少し冗長だったので私は要点をまとめるよう求めた。彼らは兵器開発と戦争が趣味の人間で、私は彼らの戯れにつき合うつもりはなかった。なによりもシンプルさが必要だ。技術者の一人、イノ・ゲラは若干不服ながらもすぐに要求に応じた。

「満載排水量は18万6000。我が国最大級の規模です。標準搭載機は爆撃機210、偵察機70、機動的小型機50。総乗員8000。新空母はナド駆逐艦15隻、潜水艦3隻と部隊を組み進軍します。搭載した対地ミサイルの射程距離は惑星の直径を網羅。特殊な電波妨害シールドにより、新空母の座標特定は不可能。戦略上担う役割は多重的。艦隊同士との戦闘で対抗し得る艦船は存在しません。攻撃力は卓越しています。」

私は冷たく聞いた。

「完成予定日と建造費は？」

「後一ヶ月もすれば進水出来ます。建造費は予算内に。技術者、開

発者の協働も効率的だったと報告しましょう。」

私は辛辣に見解を述べた。

「巨大な航空母船で敵国を威嚇する「砲艦外交」はすでに終わりを告げた。政府首脳が求めるのは実地的な軍事力だ。機動性、攻撃力、防衛機能に劣るのならば、そんなものは必要ない。予算を食い潰すだけのミリタリーなどいらぬ。みな、自覚するように。」

イノ・ゲラは自信に満ちていた。まだ二十代後半の青年だ。それがプロジェクトを牽引している。彼の才能と人望は私も認める。彼は言う。

「第二執政官を必ずや満足させます。新艦は戦争をいち早く終わらせるでしょう。」

「それは結構。」

私はなるべく感情を控えめにして応じた。その後、新空母の戦略性と軍事攻撃のパターンについて議論が交わされ、会議は終わった。時間にして2時間10分弱。多少ムダな議論も私には見受けられた。私は退席する時、会議室の室内装飾を見た。歴史的叙事詩をモチーフにしたホログラムの天井画が描かれている。財務、軍事、外交。国家の行く末を決めるべき場所に美意識を無闇やたらと刺激する美術は無用で低俗。必要ないと私には思えた。・・・「悪趣味だ」私は胸の内で静かに呟いて「F・2075D」から離れ、次の仕事、反戦組織掃討計画幹部との食事会へと赴いた。私の耳には、計画が始まり、ものの半日も経たない内に、個別に活動する反体制活動家三人を拘束したとの報告がすでに届いていた。拘束された人間は組織の中間層に位置する人間で、組織全体への影響、衝撃は少ない。言わばこれは反体制組織への宣戦布告、威嚇行為のようなものだった。私はホログラムモニターで三人の詳細情報を確認した。「ノウ・ミラボウ・37才・証券会社勤務、居住区・N380阿賀区、扶養家族・妻ノウ・32才、息子・チャベル・5才」。茶褐色の瞳をしたノウ。仕事から見て彼は社会的成功者の一人だろう。経歴からも平穏な社会生活を営んでいたと推測出来る。彼を秘密裏の反戦活動

に駆り立てた動機は何か。彼の心、ポリシーは速やかに暴かれるはずだ。ノウの瞳が私には少しくすんで疲れているようにも見えた。私は映像を切り換える。「ナグマ・ゼイヤ・28才・大手ネット出版社「ラグロー」勤務、居住区・DG24若葉区、扶養家族、なし、独身。」。ラグローと言えばこの十五年で急速に成長した新興企業で、言論、社会派、カウンターカルチャー、エンターテインメントなど幅広いジャンルの電子書籍を売っている会社だ。社員は待遇も良く、一つの政治姿勢にかたよらないよう社員教育もされていたとも聞く。中立の精神を持つ企業の社員が極端な反体制活動に加わる。戦争による国家・社会の二極化を私は感じた。私は映像をまた切り替える。「二ナ・シャラビイ・24才・斎葉工科大学大学院在籍、居住区・S971仁科区、両親と同居」。斎葉工科大学大学院、ナノテクノロジー研究の国際的権威、アオキ・ガクジンら、名のしれた教授がいる名門大学。インテリ学生が政治に関わるのは珍しくない。反権威思想に心酔し、学生運動に加わるのはたやすい。ただ斎葉工科大学は組織だった運動はなかったはず。加えて創設当初から学生風土は穏やか。政治にはノンポリシーの大学だったと私は認識している。政治や社会活動を軽視しがちな、きわめて学者肌の知識人を輩出しているのでも有名だ。反戦の気運は学生気質を変えるほど浸透しているようだ。私は、そんな物憂い思いを抱きながら、食事会会場へと足を運び、席についた。食事会では計画の最高幹部、ガカ・ジャナメが計画をつぶさに説明していった。私自身が計画の立案者でもあるので彼の能力は頼もしくもあった。彼は言う。

「現在の反体制活動家の特長は組織立っていないという点です。拘禁した三人の活動家も組織の上層部に通じるような情報は持っていません。隠蔽工作がよほど手慣れているのでしょうか。しかし、いかに活動が個別的であろうともグループの所在地、潜伏先の特定は出来ず。すでに十七に及ぶ活動拠点が特定済みです。彼らは我々計画遂行チームの管理下にあると解釈していいでしょう。」

私は人指し指を口元にあてがい、尋ねた。

「計画の第一段階は？」

「初動期にあります。今回検挙した三人がシンボリックな存在です。まず個人活動家を一人一人、拘束していきます。これは特定出来ている22の反政府組織への揺動作戦です。そして組織が極わずかな動きでも見せ次第、計画は第二段階に入ります。彼らの活動拠点を第四、第五、第七課の掃討チームが占拠するでしょう。幾人かの死傷者が予想されますが鎮圧に時間は掛かりません。特に今夜、第二執政官が視察なさる第七課はエリート部隊です。首尾よく成果を挙げましょう。」

私は黙って聞いていた。彼は続ける。

「影響力の強い組織が制圧されれば、民衆が大きな動乱を起こす可能性もあります。予測される事態です。軍とAMSSOSI、そして掃討計画チームの連携が必要となります。もし反乱が起これば、潜在的な不穏分子をも大量に拘束出来るはず。全ては「スムーズに」です。」

ここで私は彼に最も重要なポイントについて尋ねた。

「琥珀の広場。時計塔の地下街については？」

ガ力は指を組み合わせて、得意気な面持ちで話した。

「時計塔の地下街、時に法の介入さえ拒む無法地帯。デカタンに溺れる、腐敗し、倒錯した独自のコミュニティ。この地下街にキーパースンの多くが潜伏しているのは確実です。我々は自己増殖を繰り返す、この謎めいた地下迷宮に手出しが出来ないのか？いいえ決してそうではない。超A級不穏分子「A・130F」の拠点も三つ陥落させて、管理下に置いている。国家内自治領とでも言うべき共同体、「時計塔の地下街」を我々は制圧可能なのです。」

私はガ力の含みを持たせた言い回しに興味を惹かれた。

「じゃあどうする。地下街にいるだけの無辜なる民をも巻き添えにして銃撃戦でも起こすのか。」

「いいえ、地下街の反政府組織には表向き自由を与えます。当然我々の管理下における制限された自由です。」

私はガカの話の核心をついた。

「それで彼らのネットワーク、活動パターンを把握する。後、即座に、反政府組織に壊滅的な打撃を加える。」

ガカは私の指摘に満足げだった。そして彼の顔は私の指摘以上の目論見があるのを仄めかせていた。ガカは続ける。

「それだけでは終わりません。我々は彼らに・・・、罪を犯させるのです。彼らが正しいと信じている反戦活動が、時に残虐で非人道的であるのを彼ら自身に自覚させるのです。彼らがプランを実行すればする程、彼らは暴徒として認識され、人々の心は離れていく。支持基盤の一切を失い、弱体化した彼らを、我々は一掃します。戦争と反戦の二元論がいかにも毛であるかを国民は理解するはず。反戦家のアンモラルが、国家間戦争の正しさを逆に浮かび上がらせるのです。鮮明に。」

私はガカの計略に体制のマキャベリズムを垣間見て、少し不快だった。だが同時に勝利に酔う優越感をも感じた。私は最後に彼に尋ねた。

「怪人。怪人「オルザヴァ」については？」

ガカは思わせぶりだった。有能さゆえだろう。彼の顔には自分の能力へのプライドが深く刻まれていた。彼の鋭い瞳は才気で満ちていた

「オルザヴァ。彼は時計塔の地下街にいます。確実に。彼は死んでもいなければ、研究材料の一つとして解体されたのでもない。そして民衆に迫害されて時計塔に逃げたのでもない。彼は自らの思想と哲学を浸透させるべく、隠遁しながらも活動しています。彼の手となり足となる人間を利用しながら。彼は着実に！自分を生み出した権力中枢に近づいていくでしょう。対抗し得るのはAMSOIと我々特務部隊だけです。どうかご期待のほどを。」

私はガカの表情から改めて知った。体制と反体制側との対立という以上に、根深い思想上の対立を「怪人」は作り出しているのだと。国家計画の全容、怪人についての断片的な情報について、知ってい

ることは人それぞれであつても、怪人の存在は人の心に争いの火種を落としているのだ。私はガ力と深く握手すると、憂えた思いで料理店から離れた。それからすぐに私は第七課の訓練施設へと向かった。最下層空路をエアカーで走っていると、私の視界に、闇の精霊に扮した子供達の姿が飛び込んできた。そう、今日は闇の精霊の祝祭日だ。住宅街の電気も消えている。子供達はみんな、衣装を工夫していて、私の子供時代とはまた一風変わった趣があつた。顔のペイントも白や黒の単色ではなく、鮮やかな蛍光原色を多く使っていた。私の心はほんの一瞬、わずかな時間だけ子供時代に戻り、両親が暗殺された記憶を思いだしかけて、その寸前、現実へと再び引き戻された。私の振り返るべき幼少期が閉ざされているのならば、それはそれで構わない。自己防衛本能の一つだろう。私の心は感傷には一切浸ることなく、感情にやや起伏のない成人としての今！現在に適応し、子供達の姿が遥か後方に遠のいて行くのを見送った。

雪降る夜 2

私を乗せる車は夜闇を走り抜けて、第七課の訓練施設に到着した。施設の訓練所は、防弾壁でガードされた半径二百メートル程の巨大屋内だ。そこは触感のあるホログラムで幾つもの戦況をシミュレーション出来る場所だった。トレーニング光景は眺覧室から、直接に、もしくは映像で間接的にモニタリング出来た。私が教官に眺覧室へ案内されると早速、訓練が始まった。シチュエーション一、反体制組織が立て籠もる本拠での戦闘。十五人程で編成された第七課のエキスパート達は速やかに敵陣を包囲し、多種多様な戦闘パターンを見せていく、銃火器類、レーザーガン、パーサイト・ボムによる攻撃。駆動機、ランチャーによる奇襲。地雷の妨害。彼らは幾つものトラップを押し退けて、緻密に組み立てられた敵戦闘プログラムを打ち破る。何千万種に及ぶフォーメーション、戦闘の展開を予想したプログラムは、予測不可能な第七課の動きに対応出来ず、本拠への侵入を許す。第七課は複雑に設計された敵本拠を突破し、屋内戦に勝利、敵リーダーを拘束すると本拠を陥落させた。私は彼らのフォーメーションに幾分の不備があったと教官に指摘した。教官も納得ずくの様子でプログラムをいち早く組立て直すと私に約束した。シチュエーション二、密林に逃亡した不穏分子達とのゲリラ戦。先の本拠戦と違い、自然環境でのランダムな戦闘。密林での銃撃戦にのぞむ第七課の連携は華麗で優雅、とても洗練されているように私の目には映った。多彩に仕掛けられたトラップを避けて、不穏分子を追い詰めていく第七課。「スマート」。私の脳裏に一つの単語がよぎった。結果、犠牲者一名、負傷者一名を出したものの潜伏した敵対者を全て拘束、あるいは射殺した。私はシチュエーション一より、シチュエーション二の方が第七課の技量が発揮されていると評価した。教官は今回の訓練データを記録すると、敵戦闘プログラムをさらに向上させたようだった。彼は優れたプログラマーでもある

のだ。二時間に及ぶ訓練が終了した第七課のメンバーは眺覧室に敬礼すると武器のメンテナンスルームへと退室していった。ただ一人、第七課のリーダー、カザキ・クサバラ特尉が眺覧室へと私に面会に来た。彼は引き締まった筋肉質の体、スリムな体型で、軍人氣質とは程遠いラフで洒落た印象の男だった。彼は私に一礼すると質問してきた。

「いかがでしたか？第二執政官。第七課の活躍振りは。」

私は彼らの技術を称えるときにも慢心をいさめた。カザキは意に介さない様子で会話を続けた。私の表情は冷徹そのものだっただろう。私は会話を楽しむつもりなど一切なかったのだから。カザキは言う。

「第七課にとって小規模な戦闘における連携は、もはや反射神経的です。考える間なく、体が反応する。意思疎通の素早さには抜きんでいます。」

私はカザキに有能さと軽薄さの二つを見てとった。彼には隊員を率いて、仲間とともに死の危険をおかすリーダーとしての資質にやや欠けている。角度を変えればゲーム、スポーツ、お遊び感覚でミッションを遂行できるセンスは、仲間の恐怖心を和らげる能力とも言えるかもしれない。私は彼が優れた特殊戦闘員であるのには肯定的だったので、彼にリーダーの自覚を促すような言葉は一切かけなかった。彼の才能をただ単に褒めて、彼の戦意を昂揚させる、彼の優越感を刺激する言葉に徹した。

「反戦組織の軍事力、および屋内戦、僻地戦、市街戦、ゲリラ戦における能力は一般人武装のレベルを遥かにしのぐ。それでいながら完成された第七課の戦闘能力に私は信任を置く。私は第七課がノルガバ宰相の要求に応えられる唯一の部隊だと考える。さらなる精進を私は期待する。」

カザキの目が一瞬、冷淡で侮蔑的になった。この男も単純な男ではないようだ。指図するだけで部下を殺し合いの駒として扱う政治家に反感、軽蔑に近い感情もわずかながら持っている。一瞬だけ垣

間見えた彼の本心はすぐに彼のラフでフラット、表面的な人格の一つに隠蔽された。彼は微笑んだ。

「私達第七課は、宰相、第二執政官の杞憂を一掃し、反政府組織を一網打尽にすることでしょう。存分にご期待ください。」

彼の瞳は鮮烈で、猟奇的でさえあった。獰猛な攻撃性を私は彼に感じた。そしてここで秘書が私に時間を伝えた。

「第二執政官。お時間です。宰相との会談が近づいています。お早く。」

私は秘書に尋ねた。

「宰相の今日の公務は？」

事務的な声で秘書は答える。

「宰相は一日、陸海空、各軍の將軍と戦況の検討。そして戦略の確認、再修正に従務されました。十二時間作戦会議室に籠もりきりでした。」

「分かった。ご苦労。」

私は秘書にそう伝えるとカザキと教官を一瞥し、訓練施設を去った。訓練施設から離陸する車内で、私の瞳の奥に瞬く光の洪水が再生された。レーザーガン、爆弾の光と熱、発熱灯の七色の光。鮮やかで、凄惨。美しい光景だった。あの迸る光が人を殺すのだ。軽く憂い、物思いに耽る私の心に、闇の精霊の衣装を纏った子供達の姿が蘇った。彼らの顔にペインティングされた螢光塗料は、兵器と同じ光を反射させながらもその役割は余りにも違う。そのささいな「気づき」が私の心を揺さぶった。一方は幸せを、もう一方は惨劇をもたらすのだ。私はその惨劇が避けられないとは知ってはいたが。憂愁にとらわれた私の胸に、子供達の無邪気な笑顔がもう一度よぎった。束の間の安らぎ。例えどんな境遇にも心の置き場はあるものだ。私はそう感じ、小さく息を吐き出した。車は空路を経て、宰相との会談の席、遺伝子解析機構へと飛び立って行った。遺伝子解析機構・枢要機密保管庫。いつ訪問しても冷たい印象のする場所だ。人間の生体の仕組み、構造を繙きながらも、解読した科学的発見に

謎めいた神秘のヴェールを被せてしまった場所。私は地下十二階A・75にある枢要機密保管庫へと向かう。戦争のきっかけを作ったイデオロギーの安置室。国際的融和を目指していた生命理学研究者達に隠蔽体質をもたらした岩窟。人々に屈折した思想を植え付けた、心の澱の貯蔵庫。それが枢要機密保管庫だ。私は円筒状のエレベーターで降下しながら、人間が科学で自然に踏み込んでいいのは一体どこまでなのかに思いを巡らせていた。私はセキュリティの厳重なチェックを経て、保管庫へと入室した。薄暗がりの中には仄かな灯を燈す、二つの球体、「生体維持装置」が設置されている。硬質ガラスで作られたその生体維持装置の中、半透明な培養液には、体毛がやや濃い、成長初期にある霊長類の幼子「二人」が膝を抱えて浮かんでいる。二人は静かに眠っていた。おぼろげで淡い光に照らされて、装置を仰ぎ見る人影は宰相ノルガバだった。聡明な政治家であり、理論、思考洋式は明晰。火種となる思想など作り得ない人間。小脳の異常を及ぼす遺伝子の異常によって、左目の視力が極端に悪く、眼球がぎこちなく移動し、両目が同じように動かない障害を持つ男。それがノルガバ・アルフォネ、彼だ。ノルガバは口元に微笑みを浮かべて私を歓迎してくれた。ノルガバは日ごとに増す、過酷な公務、重責、疲労などわずかながらも感じさせない、才気煥発な面持ちで私を一瞥し、再度「二人」の霊長類の赤子を眺めた。彼の表情、顔つき、血色は若々しく精悍。軽く波打ち、赤毛の混じる髪を後ろに撫でつけた彼はスタイリッシュで、年齢が五十代半ばだと思うのは難しかった。私は彼の隣にそばだち、話し掛けた。

「陸、海、空の將軍達との軍略構想は首尾よく練り上げましたが、彼らは時に血気にはやるタイプの人間。統率するには強力なリーダーシップ、主導権が必要でしょう。」

ノルガバは意に介していなかった。強靱な意志により、彼の確信は揺るがない様子だった。

「戦争の目的が崇高である程人間は協力し、合理性を重視するようになる。些細な意見の違いは乗り越えられるよ。」

私は沈黙した。ノルガバは政治指導者の素質に恵まれ、求心力が満ち溢れていた。彼は楽しげで少し、愉悅に酔う瞳で生体維持装置を見つめた

「アノマ。いつ観察しても素晴らしい生体だと思わないか。約四百万年前に分岐した二種の猿人、ラムダとオメガ。遺伝的不一致は、各個人のゲノムの差0・1%を下回る0・02%。そのわずかな差が二つの猿人の進化系統樹を変えたのだ。」

私は静穏とした瞳で、戦争を起こした純粋な二つの生体を観察した。二人の猿人は生体維持装置内の液体内で静かに呼吸をしている。培養液が特殊な溶液であり、哺乳類でさえ水分に溶け込んだ酸素を吸引出来るのだ。その寝顔は健やかで瞑想的だった。私は期せずして唇に人指し指と中指を充てた。ノルガバは言う。

「そしてラムダは私達、黄色人種の血統を形成し、オメガは赤褐色人種の遺伝的形質を継承した。脳の容量の差は僅かに27g。それは人種間対立を成立させるに充分だった。」

私は呼吸を繰り返し、水の泡を吐き出す二人の猿人を見つめていた。ノルガバは透き通る声で言明した。

「ジェノサイドは、人類の一体性を保つために必要だ。全てが不可避なのだ。その劇的政変の中心的人物になれたのに私は誇りを持っている。人類の進化系統樹を完成させるプロジェクトに私は参加出来たのだから。これは私の誇りになるだろう。」

そう語るノルガバの瞳は優しく、柔和でありながら、どこか恍惚的だった。私は生体維持装置をもう一度見つめる。そこには自らの背負ったカルマの悲劇性に一切気付くことなく、ラムダとオメガが安らかに寝息を立てていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0041z/>

時計塔に眠る怪人

2011年11月30日16時46分発行